
機動戦士ガンダムGGENERATION-月光蝶の羽音

フリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムGENERATION -月光蝶の羽音

【Zコード】

Z2268Z

【作者名】

フリル

【あらすじ】

これは、ゲーム【機動戦士ガンダムGENERATION】のオリジナルキャラクター達が黒歴史に介入し過去の作品である機動戦士ガンダムから様々なガンダムやパイロット達と出会い、別れ、そして共闘してゆく物語です。

【あらすじ】

G・FIF 1982年、地球より宇宙へと出た人類は、月にて一つの発見をした…それは、月光蝶の繭と呼ばれた大きな物体である事が後に分かる。月光蝶の繭を発見した人類は科学を結集させ、月光蝶の繭を100年掛けて解析、黒歴史と呼ばれる月光蝶により無かつたことにされた歴史、MSと呼ばれる人型兵器、そしてそれにより運命を左右され戦つた戦士たちの記憶を得た。そして同時に人類は、自身らも月光蝶により滅びる事も悟る…。滅びる事を恐れた人類は、月にある月光蝶の繭を月の地下へ封印し、管理するようになる。そのある日。人類は月光蝶の繭から一つの滅びない方法を導きだした。それは…戦う事。黒歴史へと介入し、誤った記憶を正し、無かつたことにされた歴史を復元し思い出す事。それが月光蝶の繭により与えられた使命である。使命を受けた人類は、月光蝶の繭をシステムに取り入れ黒歴史へと介入する事の出来るシステム【ジェネレーションシステム】の開発と、黒歴史の中で戦う戦闘部隊【ジェネレーション・フォース】を設立するきっかけとなつた。

この物語は、ジェネレーションシステムが開発された年から始まる
⋮。

EP・1【ヒリス・クロード】

G・FIFE2150年4月、ジエネレーションシステムを完成させた人類は、ジエネレーションシステムのある用から一番近い「コロニー【F-1010】に黒歴史介入部隊【ジエネレーションフォース】を集結させ、最初の介入をしようとしていた。

コロニーとは、増えすぎた人類が住まつための言わば偽物の地球の事である。

コロニー【F-1010】の中にある小さな公園に、この物語の主人公となる少女はいた。少女の名前はエリス・クロード、父親譲りの金色の髪の毛に緑の瞳、母親譲りの端整な顔立ちをした少女は、学校を途中で早退しこの公園のベンチの上で趣味の読書をしながら帰宅までの時間を潰していた。

「はあ……」

本に疲れたエリスは小さなため息を漏らす。そして手元の新デザインの携帯画面に目を向けて時間を確認した。まだ帰宅時間には4時間以上ある。実家には母親があり、今すぐ帰ると早退した事がバレ、怒られてしまうからだ。学校では優秀な成績であるエリスではあるが、そんな事でわざわざ心配をかけさせたくない。

しかしエリスは今日、学校を早退したい理由があった、それは…。

エリスは目を横に向ける。どこまでも続くコロニーの見慣れた景色、空には偽りの空が広がる。しかし視線の先には巨大なオレンジ色を

した建物がある。それは正確には建物ではない船である。現在この「ロニー」には、ジエネレーションフォースと呼ばれる部隊が駐留しており、あのオレンジ色の艦はジエネレーションフォースの旗艦。

「【キャリーベース】…」

【キャリーベース】黒歴史内に存在したクラップ級とよばれる戦艦のデータをベースに、ジエネレーションフォース用に改良し簡易且つ練習用に造られた戦艦である。エリスは忌々しそうにキャリーベースを睨みその内に諦め、再び本に目を戻した。

エリスが学校を早退した理由、それにはジエネレーションフォースが関係していた。ジエネレーションフォースは政府の作り上げた組織であり、国民はその組織に積極的に協力するというものである。その協力というのは人員である、ジエネレーションフォースは優秀な人員を探していた。その優秀な人員とは兵士であるが、ただの兵士ではない。ニュータイプと呼ばれる素質のある人間を探しているのだ。その査定をする検査がエリスの学校で行われている。エリスは自分がニュータイプだとは思っていないしかしエリスは戦争には興味が無かったのだ。

「IJの世界の滅亡を守るために、他の歴史に介入して武力でもって歴史を正すなんて間違ってるわ…そんなのただの人殺しよ…」

エリスは思った事を口に出して憤りを現した。エリスは過去のジエネレーションシステム導入による戦争で父を失っている。そのために戦争とは憎しみの象徴であった。

「どうかな…」

隣から男性の声がした。エリスが顔を向けると、そこには一人の男がいた。灰色の頭に黒いジャケットを羽織り目にはサングラスが付いている。

「……？」

エリスは突然の男の出現に驚いて飛び上がるよつに立ち上がる。

「驚かせてしまつたか…悪い事をしたな」

男はそのまま、驚いた拍子に落としたエリスの本を拾う。

「だ…！だれですかあなた…！返してください…！」

エリスは慌てて男の手にあつた自分の本を奪い取る。男は頬をかいしてサングラスを外す、サングラスの下からは堅実そうな瞳がかいま見えた、瞳は鷹のよづに鋭く刺すようだつたのをエリスは感じた。

「オレはジョン・フォースの隊長、マーク・ギルダーだ」

マークは手を差出し、躊躇するエリスの手を強引に取り握手する。

「…エリス・クロードです」

エリスは嫌悪の感情でマークを睨み、手を話すなりハンカチで拭う。

「知ってるや、優等生」

マークは苦笑しながらジャケットのポケットから電子端末を取り出す。

「ヒリス・クロード、地球のトクラン共和国生まれ、トクラン内戦後、宇宙ロボット・1010に移民、現在はF-1010内にあるグラウシア中学校に通学1年生から3年生まで首席、年齢は15歳…身長と体重は…」

「言わないで下さい」

一通りいい終えたマークは、電子端末の電源を切りジャケットのポケットにしまう。

「それで…わたしに何の用ですか…」

ヒリスの言葉にマークはゆっくりベンチに腰を降ろす。

「オレは君をスカウトに来た、ジェネレーションフォースとして共に戦う仲間として…」

マークの言葉に、ヒリスは胸を驚撃みにされたような苦しい感覚にとらわれ目を見開く。

「や…そんなの…」

動搖したヒリスにマークは微笑み掛けた。

「残念だが既に決定されている、君の母親にも話はしてきた…喜んで君を差し出すそうだ」

マークはさうして再びジャケットのポケットに手をいれ、今度は手

配書をエリスに見えるように渡す。

エリスは手にとりその文面をまじまじと眺めた、そして肩の力が抜け、目眩を起こしそうな錯覚にとらわれる、逃れようのない事実があるからだ、母親のサインといつ、決定的な…。

「…母のサインです」

「当然だろう?、ジェネレーションフォースがわざわざここに旗艦と共に来たのは、ジェネレーションシステムがジェネレーションフォースに必要な逸材として君を選んだからだ、でなければ一日前に介入行動が始まっていた」

では…エリスは思考を凝らした。そして回想する…ジェネレーションフォースはこの「ロニーに停泊したのは自分の責任だったのではないか?では、母親がサインしたのは何故だろうか?彼女は父が死んでから気が狂うようにジェネレーションシステムの開発に携わっている研究者だった、ジェネレーションシステムが選んだと言えばサインするだろう。

「さあ、そろそろ時間だ…行こうか」

「嫌です、わたしはジェネレーションフォースへの参加を拒否します」

エリスはマークに対して怒鳴るような声色を絞つて出した。

「わたしは戦争なんてしたくない!人を殺すんですよ!?」

「オレだつて撃ちたくはないさ」

しかしマークは冷徹な顔になる。

「だが戦地で相手にそんな理屈は通用しない、撃たなきゃやられるとだから撃つ、黒歴史の中には殺さない戦法を取ったパイロットも数多きいるが、オレにそんな技術は必要ない」

エリスは首を横に振り、前に出る。

「わたしはまだ15歳です！…戦争なんて…」

「10歳で戦地に身を投じた子供なんてやまほどいるわ、戦争に年齢は関係ないそれに君は…」

マークはじっとエリスを見つめた。エリスはその迫力に黙り込んでしまつ。

「二コータイプだ、二コータイプならば尚更年齢は関係ないぞ」

マークの言葉にエリスは更に囁み付こうとした。

「隊長ー」

そこに一人の青年がやって来た。マークはエリスからそちらに顔を向け、エリスも青年を見た。青年は額に灰色のバンダナを巻いており、マークと同じジャケットを着ている。

「なにしてんすか…」

青年は不満そうにマークを睨んだ。マークは苦笑を浮かべる。

「何をしている…か、 女学生と他愛ない会話をしているだけだ」

マークは「冗談混じりに」言えば、青年は頭をかく。

「またまた「冗談つきついですよ」

エリスはマークに顔を向ける。

「誰ですか？」

エリスに聞かれたマークは青年から顔をエリスに戻す。

「奴はラナロウ」

「【ラナロウ・ショイド】だ、 ジェネレーションフォースでパイロットをやってる」

ラナロウはエリスに手を差し出す。 気前の良さそうな好青年な様子が伺えた。

「エリス・クロード…」

握手しようとしたエリスの手を掴んで引き、同時にエリスの腹部を衝撃が突き抜けた。

「…うぐっ！」

エリスは突然の衝撃で意識が暗くなる。 その薄れ逝く意識の中で、初めて殴られていた事を確認した。

「ラナロウーー！」

マークはラナロウに対して怒鳴るが、ラナロウは大して気にする様子なく気絶したエリスをさしつかと肩に担いだ。

「んな事よつやつやと行ひば……あまつ時間を無駄に出来ねえ……」

マークは頬をかいてから渋々ため息をはきながら頷いた。

「もうだな……」

そして公園の外に停車していた車に向かつ。

「ラナロウ」

向かう途中にマークはラナロウを呼び止める。

「まだなんがあるんすか？」

嫌そうな態度を表すラナロウにマークは苦笑した。

「女の子に拳は良くない」

「……」

ラナロウは終始黙り込み、小さくうなづいてから車へ向かつた。

EP・2【ヒルクレーショーン】（前書き）

「ナロウ」により、無理矢理誘拐されたエリスは、キャリーベースの医務室で目を覚ますのだった。

EP・2【シリアーション】

「う……ん……」

体が重い、そんな感覚がエリスの精神を覚醒させる。石のように重く硬い瞼をやつとの事でこじ開け、まばゆい光りが闇に慣れた瞳を貫く、それはまるで槍に貫かれたような痛みと共に、景色が広がつて行く。

「あー起きた起きた！」

エリスの田の前に癖毛の田立つ女の子の顔が浮かび上がる。女の子は仕切りに誰かを呼んでいるようである。

「はーはーはいはいー！」

奥からそんな声がした。そこでエリスは体を起こして辺りを見回す。辺りには清潔感のある白いベッドが並んでおり、白いパーテーションが辺りを囲う。まるで医療施設じゃないか…エリスはそう思つと同時に記憶が覚醒していく。

「確かわたしは…公園で…」

公園での出来事を思い出し、一気に焦りが生まれる。

「起きたよつだね」

現れたのは室内だといふのに帽子を被り隙間から金髪のポーネー^ルがかいま見える。筋肉質な女性だった、ジャケットはマークやラ

ナロウと同じだが、ズボンは作業ズボンのよつなダボダボした感じの服であり、油による汚れが目立っていた。

「あたしゃ【ケイ・ニムロット】ジエネレーションフォースのメカニックれ」

ケイは素直にエリスの手を取り握手を交わす。

「おー！ストライクウーなんぢやつて～」

となりで先程の少女が騒いできた。

「そいつは【クレア・ヒースロー】、ただの馬鹿だからほつとけ」

ケイは呆れた調子で手をしつしつと振つてクレアを追つ払つ。

「あの……」

エリスは、ケイに顔を向ける言葉を漏らす。

「お察しの通り、ここはキャリー・ベースの中を……ラナロウに誘拐されて来たんだってね、可哀想に」

エリスの記憶にラナロウに殴られた事が思い出される。

「そうでした！なんですかあの野蛮な人は……それとわたしを家に帰して下さい……」

エリスにまくしたてられ、ケイは頬をかく。

「あいつは元々傭兵あがりだからなあ…まあ、後であたしがぶん殴つとこでやるよ」

「坊やだからさーなんちゃってーーー！」

途中でクレアが割つて入り椅子を持って来て座る。

「じつとじてりー大人しくしてろー口を開くなーーー！」

ケイはそういうてクレアをひっぱたき、叩かれたクレアは頭を押されて蹲る。

「こいつがエリスより年上だなんてなあ…」

ケイは更に呆れた様子で親指でクレアを指差した。

「わたしは…帰れるんですか？」

エリスが聞けば、ケイは何かを言おうとした。

「それは無理な質問です…」

パーテーション越しに綺麗で透き通る声が響いた。するとパーテーションの隙間から女性が顔を出した。黒一色の制服に白い肩掛けをみつけた女性だった。

「マニアー！なにも誘拐なんてしなくたつてー！」

「少佐を付けなさい、ケイ・ームロット

マリアと呼ばれた女は一言でケイを黙らせ、エリスの前に行き、一度敬礼した。

「わたしは、ジエネレーションフォースと共にキャリー・ベースに同乗します地球連合軍少佐【マリア・オーエンス】です」

拳手していた手を下げ握手を求める。

「何故、地球の軍人が？」

エリスの問い掛けにマリアはキョトンとする、が、すぐに確りと両目でみすえた。

「連合軍は今回のジエネレーションシステムにおける黒歴史への介入を、良くは思ってはいません…コロニー側が黒歴史の知識から開発したMSで地球に進行するのではないか?なんて言葉も囁かれています。」

マリアはそこで一呼吸置いた。ケイは何かいいたそうな顔をしている。クレアもとなりで退屈そうにしていた。

「そこで、わたしが同行し…あなた方ジエネレーションフォースの動きを探るよつ命ぜられ今にいたします」

そう言葉を切ると、マリアは脇に抱えていた包みをエリスに差し出した。

「これは…?」

不審をいだいたエリスは、受け取った包みを膝に置き、ゆっくり開いた。それはジェネレーションフォースのジャケットとズボンだった。

「動けるならば着替えなさい、外で待ってるわ」

マリアはそれきり外へ出でていった。

「たく……せつかちなやつ……」

「あたし、あいつ嫌い」

ケイは隣のクレアの頭をポンポン叩き、エリスに手を向けた。エリスはジャケットを手にしたまま動かず震えていた。

「わたしは…兵士なんかには…」

「決めるのはあんたよ、だが今は袖を通すしかない…袖を通さないと今度は勾留されることになっちゃうんだ」

「そんなん…わたしは悪い事なんてしていないのに…」

エリスの反発にケイは欠伸程の余裕を見せた。

「あたしにとつちや関係ねえが…ジェネレーションフォースはあんたが必要なんだとさ…別に戦争なんてしなくたって艦にのつてりやそのうち帰れるさ…」

「黒歴史は触れてはならない過去です。それに介入するなんて！」

「仕方ねえだろ？そりこつ国なんだからよ」

ケイは即座に流し、エリスは黙つてジャケットに袖を通して、ベッドから立つた。

「来ましたか」

外ではマリアが腕をくんだまま壁にもたれかかり立つていた。

「IJの艦を案内します… つこてきてください」

マリアは冷たく言いながらわざと早歩きで歩いていった。エリスは後ろを着きながら窓を見る。外には無限の宇宙が広がっていた。

「え？… IJは…？」

「円の付近、B 3エリアよ… もうじき黒歴史への突入が開始されるわ」

マリアも手を宇宙に向けた。

「じーーー！冗談じゃないです！なんでわたしもなんですか！！！」

「つむせーな、ぐちぐちつぜえだ…」

食堂からバンダナを巻いた忘れもしない、ラナロウが顔を出した。

「あなたは…」

エリアはラナロウを見るなりマリアの後ろに隠れた。

「なんだてめえかよ……」

ラナロウは愛想悪くエリスを視線から外し、それからマリアを睨む。

「おい軍人、この船ででかい面してるんじゃねえ……日暮りなんだよ

ラナロウの言葉にマリアの手に力が籠もる。

「何をしてるラナロウ」

奥からマークが顔を出し、マリアと終始見つめ合つ。

「…マリアっ」

「マーク!？」

マリアとマークの顔色が変わり、ラナロウキョトンとした。

「久しぶりじゃないか、どうだ軍は?」

「あなたが抜けてから田に余るわ……あなたこそ傭兵は止めたの?」

一人は深く会話を始めてしまった。入り辛そうになつたラナロウは食堂に帰ってしまった。

「あの……人は……」

エリスは間に割つて入り聞いた。

「軍の同期だ」

「恋人とかじゃないわよ?」

マリアとマークは息の合ったチームワークのような会話をした。

「それじゃ、キャリーベースに乗り込んだ軍人はお前か」

「ええ…こまはエリスさんに艦内を案内していたの」

マークは頷く。納得したように腕を組みエリスに向ける。

「強引に連れてくるようなやり方をしてすまなかつた…」

マークはそう頭を下げた。エリスとしてはそこまでされると即くじらを立てるわけにも行かずには頭を軽く下げた。

「いえ…」

重い空気が流れる。だれもが金縛りにあつたかのように動かないその中で一番最初に動いたのはマリアだった。

「や… もあー艦長に会いに行きましょ~ブリッジ」

「それならオレも行い~、マリアの様子を見ると、お前もあの口二一から乗つた口だろ?~」

「クラッブ級の戦艦は一通り乗っていますから、貴方の助けはいりませんよ」

「そういう訳にはいかんな、このキャリーベースはクラッブ級とは違うのだから」

マークはさう言つて組んでいた腕を解いて歩きだす。

「ついてこい」

マークに言われるがまま、マリアとヒリスはマークの背中を追い掛けた。そしてブリッジへとたどり着く。

「艦長、新しいクルーを連れて来ました」

マークが中に入るなり凄まじいアルコールの臭いが鼻を突いた。マークが中に入るとそこには女性がいた。すらっと背が高く細い女性だった。

「（）苦勞、ギルダー君」

女性はキツい目付きで後ろの一人を見た。一人はあまりの鋭さに少し引いてしまう。

「恐がらなくていい、奴は目付きはキツいが見かけ倒しからな
マークが言えば女性はマークの脛を蹴飛ばした。

「ぐはっー。」

脛を押されて蹲るマーク。それを見下す女性は冷酷な目を向ける。

「こう見えてわたし、徒手による格闘は得意なの…見かけ倒しで悪かつたわね?」

そして女は顔を此方へ向ける。

「わたしは二キ、【二キ・テイラ】このキャリーベースの副艦長をしています」

二キは鋭い目付きを崩して笑みを向ける。

「副艦?…艦長殿は?」

マリアが聞けば、二キは顔を横に向ける。

「ぐがー…ぐがー…」

艦長席では中年の男が酒の瓶片手に居眠りをしていた。

「職務中に…飲酒だなんて…」

マリアは少し瞳を潤ませ。エリスは我慢しきれずに鼻をつまんだ。二キも苦笑しながら顔を戻す。

「他のクルーを紹介するわ」

二キはそう言ってブリッジの前にある操舵席に座る男の横に行つた。

「おーなんだ新人か?一人とも可愛いねえ!特に右の金髪の一…」

「操舵に集中なさい！…」

ニキに頭を叩かれた男は軽口を止める。

「こいつは【エルнст・イエーガー】操舵の腕は一人前だけど女の敵よ」

ニキは女の敵を強く強調した。次にニキはその横にある席へ向かう。そこには一人の男女がいた。1人は褐色の肌をと髪型が特徴的な少女と、大きなインカムをつけた少年だった。

「シェルド」

少女にシェルドと呼ばれた少年はエリスの方に振り返り、インカムを外す。

「ぬあ！」

シェルドは突然声を荒げ立ち上がる。

「まさか…新人！？」

シェルドは素早く座席を飛び越えてエリス達の元へよじ登る。

「よつしゃあー！…ついにオレの出番…！パイロットデビュー…！…通信は君にパー…」

そんなシェルドの頭に雷鳴のようなマークの拳骨がふりそそぐ。

「こつてええ……」

「パイロットになりたきや、シユミーレーショントレーストで50点以上
とつてみる……話はそれからだ」

マークに言われたシェルドは落ち込むよつて座席にもどる。

「あー、オレは【シェルド・フォー・リー】よろしくな」

シェルドは眩しい笑顔を向けてきた。その横にいた少女はエリスを睨む。

「【レイチエル・ランサム】よ……」

レイチエルはそれきりシェルドに体を向け、シェルドの頭を気にして撫で始めた。

「そして俺が【ゼノン・ティーゲル】だ、よろしくなお嬢さん方」

寝ていた筈のゼノンは身体をだるだるながらに向かた。

「今日付けでこひらへ配属になりました。地球連合軍少佐、マリア・
オーネンスです」

マリアは軍人らしい綺麗な敬礼を見せ姿勢を正す。しかしづノンは頬杖をついた。

「か～お堅いねえ、軍人のお嬢さん～まるで昔のどつかのバカだ」

ゼノンはさりげなくマークに目を向け、マークは素知らぬ振りをし

た。

「は……はあ……」

「肩が凝るだろ？リラックスしてくれよ、少佐殿」
それきりゼノンはマリアに顔を向けずにエリスを見た。

「あ……」

エリスは人見知りな訳ではない。単純に迷っていたのだ。

「この状況でもまだ迷いの色か……綺麗ないい瞳をしている」

ゼノンは真っ直ぐにエリスを見つめていた。

「エリス・クロードです……」

エリスはゼノンから皿を返らじて名前を絞りだした。

「マーク、少佐殿とエリスちゃんにショーモーションテストをして
くれ」

ゼノンはそれをいいながら身体を進行方向へとむける。

「了解」

マークはエリスとマリアを連れて外へ出でいった。

「むつふふふ」

居なくなるのを確認してゼノンは笑いだす。

「ヒリスちゃんの成長が楽しみだな、なあ？ イエーガー？」

前でイエーガーはガツツポーズ、同時に一キの回転回し蹴りが一人を制圧した。

「この一口リンク共が…業務しろ業務…！」

そんな事件などしりもしないヒリスとマリアはMSドックに来ていた。

「これがドック、そしてジェネレーションフォースの最新鋭主力MS【トルネードガンダム】だ」

マークに紹介されたマリアとヒリスはトルネードガンダムとよばれた兵器を見上げる。紺色を主体にオレンジ色を織り交ぜたトルネードガンダムのデザインは美しく、兵器であることを忘れてしまう。トルネードガンダムはドックに一機あった。

「たつた一機だけ…？」

マリアは小さく呟いた。

「一機で十分や、ヒリス」

マークに呼ばれたエリスは歩み寄り見上げる。

「後ろの機体はお前のトルネードガンダムだ… いつでも出撃出来るようにしておけ」

エリスは田を見開いて驚きを現した。

「なに…言つてるんですか…わたしは」

「『ロード』でのMS大会で優勝しているのだろう?ならばMSが初心者なわけではない」

「わたしは戦争なんて!」

「だったら今のうちに不殺の戦法でも練習しておけ」

マークの強い言葉に押されてエリスは黙つてしまつ。

「なんだ、あんたらあたしのジックに何のよひだい?..」

そこにケイがやつて来た。隣にはクレアもいる。

「シミコ ルーショントーストだ、トルネードガンダム!『機のコクピットをシミコ ルーショントーストモード』出来るか?」

ケイは悲しい顔をして頷く。

「わかったわ…」

そして二号機の足元まで行き、端末を操り始める。その間にマーク達はデッキで一号機のコクピットまで上がり、ハッチを開く。

「オーケー!」

ケイが下から叫びマークは鋭い皿をマリアを見た。

「必要なことは強がお前からだ」

「ゼーの部隊に監査を戦わせる部隊がいるのさ……」

マリアはため息混じりに口くぱっしーに座り、シミコレーションが起動する。

マークはHリスを隣のコンピュータモニターの前に連れていったそばでゼシコーレーショーンでのマニアの動きが移し圧されている。

「戦闘レベルは最高の5だ、1-2機のトルネードガンダムが相手だ異論はない。」

マークが口くぱっしーのマニアに聞いた。

「相手に不足なし、1分からなーいわ」

マリアの声が口くぱっしーから帰っていく。

そしてシミュレーションは始まった。結果的にマリアは強かった。1-2機もの機体に囲まれた状態で、被弾はたつたの一回、腕部にいたガトリングガンを避け損ねて足の装甲に擦つただけである。

「腕が少し鈍ったんじゃないかな?」

出てきたマニアマークは冷やかすように言った。するとマリアは

首を横に振る。

「トルネードガンダムの性能にわたしの反応値が追い付かなかつただけです」

「そうか、だとしたら満点だな」

マークは、コンピュータから端末にデータを打ち込み、マリアの点数を弾きだす。98点と弾き出され、昔のゲームのようなランキンががあらわれた。一位は驚く事にクレアで100点である、二位はマークで同じ100点、マリアは三位だった。

「クレアはシミュレーションは完璧だ、しかし実戦では戦えない。あの性格だ、味方を撃つかもしれないからな……」マークがそう告げるとマリアも頷く。

「確か……」

「じりーーーあたしは味方を撃つほどバカじゃないぞーーー！」

下からクレアの声が響く。

「うそつけ！ ラナロウを後ろから撃つただろうが……」

マークがデッキから身を乗り出して怒鳴る。

「彼は、ガンダムマイスターに相応しくない……何せやつてー……

「クレア・ヒースロー！ 今からドック30周ーーー！」

クレアを怒鳴つてから戻つてくる。

「次はエリスだ、出来るか?」

エリスは不満でいっぱいだった、何故わたしなのだろうか?…という不満である。

「不満だろうが、今は我々にしたがつてもらう…」

マークはエリスの肩を掴んでコクピットに投げ入れた。

「あやつ…」

「こらからには否応なしに戦つてもいいな…」

そしてシミュレーションが始まられてしまつ。敵はトルネードガンダム13機の部隊である。

「なんで私が…」

エリスは戸惑いのなかコックピットにいた。敵からビームを撃たれる。わざと当たれば必要ない人間と思われるだろう。そうすれば帰れる、エリスはそう思った。

【ドローン】

「うわあああ…」

ビームは右腕を擦つた。瞬間、エリスの右腕に稻妻のような痛みが走つたのだ、エリスは右手を押さえてしまつ。同時にゲームが中断され、マークの顔が現れる。

「いい忘れたが、シミュレーションモードのそのコクピットには、

直撃すると電流がながれるよつ細Hじてある

「そーそんナフ…」

エリスは慌てコクピットから出すとしたがコクピットを外から閉められてしまつ。

「出つて……こからだしてくだせ……」

必死に叫びハツチモーターを叩くエリスだが、非力な少女の腕ではびくともしない。

「出してほしけりや力を見せろ、いまの電流は挨拶代わりさ……次から直撃するたび気絶するほど電流がながれるようにしておくからな……」

それいこのマークは回線を切つてしまつ。

「そんなマーカさんつ……マーカさん……」

エリスは必死に呼び掛けるがすぐ元ゲームが再開される。

「くつやおおおおつ……」

エリスは素早く座席にもどる足元のペダルを踏みつけてスラスターをふかせ、上昇することでビームを避ける。そして右手を脇に伸ばしOVSのモニターに切り替えキーボードを取り出す。

「……何故後退している?..」

外で戦闘を見ていたマークが田を細める。Hリスを示すシグナルが13機から離れていく。

「おおこ……マーク……」

ケイの声にマークはテッキから身を乗り出す。

「どうしたー！ケイ！」

マークの声にケイは驚きの反応をする。

「あいづートルネードガンダムの〇〇を書き替えてるんだー！スグースピードでー！」

「ばかな！ 戦闘中に〇〇を切り替えるだとー？」

「マーク！」

マリアの声にマークが振り向くと、既に五機ものトルネードガンダムのシグナルが消えていた。Hリスのトルネードガンダムのすばやい攻撃にあつとこつまに敵のトルネードガンダムが撃墜されてゆく。

「凄い…」「ク匹シトへの直撃を避けて、武器や頭部を狙ってるわ」

マリアは撃墜されたトルネードガンダムの被弾ヶ所をあげてゆく。

「たいした反応だな…よし」

マークはワイヤーガンを床に撃ち込みテッキから降りる。

「マーク? 何する気?」

マークは走りながら手を振り1号機へ走ると、デッキを駆け上がりコクピットに乗り込んでハッチを閉めた。

「シリューション対戦だ… エリスのシステムに乱入」

1号機を起動させ設定を切り替える。

「マーク! 何する気だ! ?」

ケイの通信が入り、マークはニヤリと笑う。

「スーパールーキーにベテランの凄さを教えてやるのさ、何人にも100点をやるわけにはいかんだろう?」

かくいうマークの手は悦びに震えていた。

「はあ… はあ…」

エリスは口を閉じて音に頼り精神を集中する。微かに聞こえるスラスター移動の音、エリスは目を薄く開きレーダーを確認する。大量に映るデブリの熱源中で、小さな熱源があった。

「……」

エリスは目を閉じて音に頼り精神を集中する。微かに聞こえるスラスター移動の音、エリスは目を薄く開きレーダーを確認する。大量に映るデブリの熱源中で、小さな熱源があった。

「ゼニー！」

エリスはデブリの先の空間にライフルを発射した。

デブリの中から顔を出したトルネードガンダムの頭部を撃ち抜き、破壊した。

「やつた…」

エリスはシートに寄りかかり脱力する。そこに通信が入る。

「あ…マリアさん？」

「エリス！マークのやつが1号機であなたの訓練に乱入しちゃったみたい！」

「え？…」

「…」クピットの右側からロックされた音が弾けた。

「へ…」

エリスは何を思つより先にペダルを踏み込んでスラスターを吹かせて上昇する。

【ズキューンー】

エリスの機体の下を、ビームの雨が降注ござり、デブリを破壊する。

「やるじゃないか、エリス」

画面の奥から一つの閃光がじゅうへ向かってくる。

「あつ！力を見せる…！」

「そんな！マークさん…！」

マークのトルネードガンダムはそのまま肉薄し、エリスのトルネードガンダムに体当たりを食らわせてきた。

「うああつ…！」

トルネードガンダムは弾き飛ばされ、ダメージと認識された為にエリスの身体に電流が流れる。

「う…！」

エリスは叫びながらビームライフルを乱射する、しかしマークはまるで流れるように動きながらライフルの弾を巧みに避け、ビームサー贝尔を引き抜き接近してくる。

「うへー…！」

エリスは素早く身を引いて左手からビームサーベルを引き抜きマークのビームサーベルを押さえる。

【バシイー！】

激しい閃光、同時にエリスの機体が側面から何かに弾かれた。マークの機体に蹴られたと気付いたのはすぐだった。

「ぎいー！ー、つああああーー！」

流れる電流による痛みを叫ぶ事で和らげてスラスターを吹かしてマークの機体に体当たりを食らわせる。

「んなつー...」

さすがのマークも直撃を食らい、電流の痛みに歯を食い縛る。

「ぐうううえええつーー！」

エリスの叫び、トルネードガンダムの腹部がまばゆく光る。

【ズビィイイー】

拡散ビーム砲が、バランスを崩したマークのトルネードガンダムに迫る。絶体絶命、しかしマークは笑う。

「甘いなエリスーー！」

マークはビームライフルを投げ捨て、ビーム砲に当たったビームライフルが弾ける。その爆風による衝撃を利用してスラスターの威力をましたマークの機体は不自然にビームの下へと潜り込み、そして両腕の内蔵型のガトリングガンを放つ。

「ドガガガガガガ！」

放たれたガトリングガンの弾の嵐がエリスを直撃する。

「うわー！ー！うわあああー！ー！」

エリスは全身を駆け回る稽古の痛みにのたうち大きく仰け反った。

止めだ！！

マークは容赦なくエリスの「クビット」にピームサーべルを突き刺し、止めを刺した。

エリスさん！！

マリアはエリスのコケビットをこじ開けた、
エリスはシートに丸まるようにして気絶していた。

「マイケル・アーヴィング」

マリアはインカムでマークに怒鳴ると、マークは頬をかいた。

「すまん、余りにやるもんだから熱くなつた…」

一 謝る前にストレッチャー！ケイ！手伝いなさい！！！」

「いわねなくたつて！！」

マリアに指示された通りにマーク達は動き出す。そこへラナロウが

やつて来た。ストレッチャーに乗せられて運ばれるエリスとすれ違
う、ラナロウには興味がないからどうでもいいことだった。ドック
に入ると、中ではケイとマークがいた。

「いつの間に足をやられていたんだ？」

マークはモニターを見つめている、それはシリコーンモードで被弾したヶ所を示すモニターだった。

「何してんすか？」

ラナロウが行けばマークはラナロウに向き直る。

「エリスとのシミュレーション対戦の結果や…勝つたには勝つたが…手酷くやられたもんだな…」

「んな……ばかな……」

EP・3【宇宙世紀0079】（前書き）

シコミレーショントレーニングにて、マーク・ギルダーによる手厚い歓迎を受けたエリス、しかしその間にも最初の介入が始まつとしていた。最初は【宇宙世紀0079】。

「う……」

不思議な感覚に田を覚ます。見上げた田の前には再び医務室の天井である。

「……んん」

エリスは重たい身体を起こすと、田眩のような錯覚に捉われる。それが喉の渴きと空腹によるものだといつ事は直ぐにわかった。

「お腹減った……」

そう一人だと咳き、ベッドから立ち上がりつつする、そこにはマリアが目を閉じて腕を組み座ったまま眠っていた。

「マリアさん?」

呼び掛けるとマリアはパッと田を覚ました。

「あースミマセン……で、エリスさん……田が覚めたのですね」

「え……あ、はい」

マリアは安心しようとしてエリスの顔色を伺い手足に触れる。

「他に変わったところは有りませんか?」

エリスは首を横に振った。それをみたマリアはようやく安心の表情を浮かべて肩の力を抜いてからゆっくりと立ち上がる。そのとき…

【各員に通達、各員に通達、これより介入行動を開始いたします。これより介入行動を開始いたします…各員は衝撃に備えて下さい】

アナウンスのあと直ぐに艦が大きく揺れ動いた。

「さやあ！！」

マリアはふらついてエリスのベッドに倒れ、そして電気が消える。

「介入…まさか…こんなに早くですか？」

マリアは咳いて天井を見上げる、エリスはといつと得体の知れない不安感で胸が痛んだ。暫くしていると電気が復旧する。

「うあっ！！」

直後、エリスが頭を押されてベッドに蹲る。

「エリスさん…どうしたの…？ エリスさん…？」

マリアが横に寄り添いエリスの顔色を伺う。

「頭が…頭が痛い…何？意志が…沢山の意志が…息遣いが…」

「」の現象は、エリスだけではなかつた。

マークの血塗

「ぐああ……な……んだ……う」

マークは頭を抱えてベッドの上で転がっていた。大の大人でも悲鳴を挙げるほどの激痛で、マークは立つこともできなに。

ブリッジ

「あああ……」

「レイチャエル！…平氣か！…？レイチャエル！…」

ブリッジでもレイチャエルが頭を抱えて倒れこみ、シェルドが血相かいて体を揺らし顔色を伺つ。

「艦長…」

一キはゼノンに向ける。しかじゼノンは落ち着いていた。

「」の宇宙世紀には意志があるものであつて、直に良くなるから放つておけばいい

ゼノンのやる気のない言葉に、一キは焦りを覚える。

「しかし…」

そんな最中、ドックからも連絡が入った。

「艦長！ クレアが！ クレアが！」

ケイは軽いパニック状態で叫び、モニターにあらわれると、その後でクレアが頭を抱えている。

「艦長が言つてほまつとけばば治る見たいよ！」

一キの言葉にケイは不安そうな顔をする。

「でもよ」

その言葉を凌まじいアラート音が遮り、シエルドは慌てレーダーに目を向ける。

「一キ！ そんな暇ねえみたいだぜ！」

イエーガーも叫び、シエルドは通信モニターの端末を操り、索敵を開始する。

「センサーに感！ …データ整合完了！ ジオン公国軍主力戦艦！ ムサイ級だとおもわれます！ ！」

シエルドの声にゼノンは渋い顔をし、一キは焦った表情を浮かべる。

「く…この地域に駐留していた部隊か！ 数は…？」

「キは声を荒げ、ショルドはセンサーの感に田田を向ける。

「ムサイ級2隻！MS-06？艦長…ザク6機の出撃を確認しました」

ショルドのまくしたてた声に、キは顔を青くしゼノンを見る。

「まことになったな…」

ゼノンは何かを考えるような仕草をしていた。

「ビーム砲来ますっ…！」

そうしてくる間にも事態は進みショルドが叫ぶ。

「わかつてんよ…！」

イヒーガーは田を熱源モニターに置きながら操舵桿を思い切り左に捻る。

【ズブィイイー！】

ブリッジのすぐ横をビーム砲が通り抜けた。

「ぐー威嚇なしか…！」

キはゼノンに顔を向ける。

「第一戦闘配備…」

ゼノンに言われるままにニキは動き、インカムを掴む。

【各員に通達！各員に通達！…第一種戦闘配備！繰り返す！…第一種戦闘配備！…】

ニキの声が艦内を駆け抜けた。それはマリアにも届いていた。

「…いきなり戦闘！？」

マリアは上を見上げたまま驚きを顕とした。頭痛が和らいできた亨リスも顔を上げる。

再びブリッジ。

「艦長…」

パイロット座席に座るラナロウがモニターに現れる。

「ラナロウ君…」

「もたもたすんな！敵が来てるんだぞ！…」

ラナロウに怒鳴られるゼノンだが、全く動揺を見せずにインカムを手にする。

「ケイ君！…第一ハッチ解放だ！…1号機を発進させる…」

ゼノンの命令にドックにいたケイは端末を操りハッチを解放する。

「発進シークエンス！…トルネードガンダム！カタパルト接続！…
発進タイミングをパイロットに譲渡！…」

シェルドの声に合わせてラナロウを載せたトルネードガンダムがテ
ッキへと運ばれる。

「敵の数は…？」

ラナロウはコクピット内の最終調整をしながらモニター越しのシェ
ルドを見た。

「ザクが6とムサイ級が2隻よ…」

シェルドの横からレイチャエルが頭を押さえたまま現れた。

「レイチャエル！無茶すんなよ！」

シェルドの声など無視したレイチャエルは隣の座席に腰掛けザクのデ
ータをラナロウに転送する。

「…ふん」

ザクのデータを受け取り、眺めたラナロウは鼻で笑う。

「雑魚じゃねえか…」

そうしてラナロウは通信を切り、それと同時にゼノンは一キに顔を向ける。

「ラナロウ君出撃後！艦を反転させ迎撃にでる……よいな！」

「了解！」「」

一通り調整を終えたラナロウはグローブの握りを確認し、グリップを握る。そして…

「ラナロウ・シェイド！トルネードガンダム！！行くぜ！…」

【ドオッ！】

カタパルトがキャリー・ベースの中からトルネードガンダムを打ち出した。打ち出されたラナロウはすぐ様反転し、背後に迫っていた部隊に向かう。

『なんだ！？』

ラナロウの「クピット」にさくからの無線に入る。

『見たことのない機体だ！油断するな…』

『連邦め…一つの間こそのような兵器を…来るぞ…』

ラナロウはあまりの敵のザクの可笑しさに笑いを堪える。

「おーりーおせえんだよつーーーー！」

ラナロウのトルネードガンダムより放たれたビームライフルの光が、真っ先に最後尾のザクのコクピットを貫く。

『うわあああーーーー！』

貫かれたザクパイロットの断末魔と共にザクが光の玉となつた。

『やられたーーなんだあの武器はーーーー？』

「わかんねえよなーー原始人にはよおおおつーーーー！」

ラナロウは立て続けにライフルを発射し、新たに2機のザクを光に変える。

「後二機ーーー！」

ラナロウのトルネードガンダムの背後からミサイルが迫り、ビーム砲の弾幕が形成される。

「ちいームサイカー！」

ラナロウは的確に敵の攻撃を避けて間合いを計る。やうしている間に2機のザクが接近してきた。

『抑えるーーー！』

「ならこれなりビーだい！…」

ラナロウのトルネードガンダムの腹部が煌めいた。

『な…』

この時の彼らはじらなかつた。拡散ビーム砲を。

【ズビィイイイ！…】

『うわあああ…！…』

接近していた2機のザクが消滅し、残つたのは1機だけだつた。

『なんだこれは…！…？化け物だ…！…強すぎると…！…』

「逃がさねえよ…！…そらあああ…！」

ラナロウのトルネードガンダムは一気にザクとの距離を詰め、ビームサーベルで頭からから竹割りにして破壊した。

「あとはムサイ…！」

ラナロウの肉眼に2隻のムサイが移る。

「メガ粒子砲…！…撃て…！…！」

そこにキャリー・ベースからの攻撃が開始される。キャリー・ベースの

攻撃はムサイの横に反れたしかしその瞬間回避行動に専念したムサイからビームによる弾幕が無くなってしまった。

「うおおおおお…！」

ペダルを強く踏み込んでスラスターを全快に開き、一気にムサイとの距離を詰めたラナロウは、背後を大量の大型ミサイルが追い掛けてくる、しかしラナロウは氣にもせず、そのままのスピードでムサイの下に潜り込んだ。

「なに…？わあああ…！」

一隻のムサイは自らのミサイルの直撃により大破し大爆発を起こす。

「後ひと一つ…！」

ラナロウは一気に隣のムサイに接近する。

「つい…！撃墜しろ…！」

ムサイのビーム砲の火線がラナロウのトルネードガンダムへと迫る。しかしトルネードガンダムは素早くムサイの下に滑り込む。

「不便だよなあ…下に武装のねえ艦はよお…！」

ムサイのブリッジを下方へ潜り込んだラナロウは、腹部から拡散ビーム砲を至近距離で発射し、ブリッジを破壊しムサイの機能を奪つた。

「いやあ、ナロウ、ジオン公国の部隊の殲滅を確認」

ラナロウは辺りを見回し生存反応を確認する。

「ご苦労だつたラナロウ君」

ゼノンからの無線が入り、ラナロウはグローブの握りを確認する。

別に、雑魚相手だしな……」

生物反応を示すアラートがコクピット内に鳴り響き、ラナロウは画面に目を向ける。画面には白旗を振るジオンの宇宙服がいた。

「本居宣長」

ラナロウは残忍な笑みを浮かべ、回線を全回線に切り替えた。

「ジオン公国軍の兵士たちに告げる。俺は、連邦地球軍のラナロウ・シェイド、君たちにお願いがある。お願いを聞いてくれるのであれば、貴君らを殺したりはしない」

「ラナロウ君！？何を！？」

突然のラナロウの行動に困惑したニキが叫ぶ、しかしラナロウは画面越しで口に人差し指を立てる。

「お願いというのは、我が艦における物資の供給だ、そうすれば俺は君たちを見逃さう」「

その浮かれた声色は医務室のHリス達にも聞こえていた。

「彼は何を言つてこるの?」

そこでマークがやつてくれる。慌てた様子ではあるがその顔は頭痛に耐え難い程で歪んでいた。

「マークー」

マリアはそんなマークに顎け寄り肩を貸す。

「俺はいい……ラナロウを……あいつを止め……」

マークは何かを知っている口振りで叫んだ。大分頭痛が治まってきたHリスは立ち上るとマークの側に寄り添つ。

「どうこう事っ」

マリアは状況を確認しようと聞き入り、マークは皿を逸らした。

「…奴は物資を奪い、脱出ボットに乗った彼らを殺害するつもりさ

マークの言葉にマリアは蒼白となつて手を離してしまった。マークは床に膝碎けになつて座り込む。

「…そつ…そればっ…」

俄かに信じがたいマークの言葉にマリアは動搖を示した。

「それは……海賊行為よ……？そんな事を……」

「あいつは傭兵だ……傭兵は機密主義な連中が自分を知った人間達を生かしておくと思うのか！？」

マリアの言葉をマークは怒鳴りたててかき消し、次にエリスに首を向ける。

「良く聞け……無闇な殺生はウォーズブレイクを引き起こし、あらたな黒歴史を生む事になる……」

「ウォーズ…ブレイク？」

「ジエネレーションフォースの役割は、黒歴史内に我々の記憶を残し、あつては成らない物を始末しなければならないんだ……確かに人を殺す内容もある」

マークは額についた冷や汗を拭う。

「だが……黒歴史だって歴史だ……無闇にその時代の人間を殺せば、後の歴史に存在しなかつた事になってしまふんだ……それがウォーズブレイク…歴史のズレや……」

「ウォーズブレイクしたら……どうなるんですか？」

「月光蝶は我らにペナルティをかす、一説によると月光蝶により選ばれた兵士が現れ試練を与えると言われている。」

エリスはすっかり頭痛が無くなっていた。それよりも走りだしていった。真っ直ぐにドックへ。

「エリス！なにやつてんだー！」

ケイに呼び止められる。が…エリスは素早くテッキに上がりコクピットに乗り込んで起動させた。

「2号機でありますーー！」

「なんだとあ？出るつづったって」

「早くハッチを開けてくださいーー！」

エリスは「クピットから叫び、ビームライフルをとると前に向かう。

「唐突だなあおー…」

ケイは、頭をかいて畠然としていた。

「ケイ君」

そこにゼノンからの通信と同時にモニターに顔が現れる。

「艦長ー！」

ケイは思わず帽子を脱いでしまつ。

「ブリッジで2号機の起動を確認した、どうかしたかのかね？」

するとエリスが回線に割り込んでくる。

「いまラナロウさんがあの人たちを討つたら、ウォーズブレイクしちゃうかも知れないんですね！？」

エリスの叫びにゼノンの顔色が変わる。

「ウォーズブレイク？」

ニキもゼノンに顔を向ける。ゼノンは小さく頷いた。

「その通りだ……」

そして、ゼノンは重い口を開いた。

「しかしエリス君、君の正義感は大したものだ……だが君はそのMSに乗つて外へ出たとたん、正真正銘、ジエネレーションフォースに配属されることとなる……良いのかな？」

その言葉にエリスは一瞬思考が止まる。そうだった。自分は帰りたかったのだ。しかし自分は今ここにいる。そして覚悟を決めるのも早かった。

「行きますッ！」

エリスの決意にゼノンは頷いた。

「後部ハッチから出る！ラナロウ君を止めてくれ！抵抗した場合は頭部を壊してくれて構わん！」

ゼノンの命令にエリスは頷き後部ハッチへ向かつ。

「頭部破壊だあー？おいおい！メカニックの仕事を増やすんじゃねえ！！」「

「艦長命令だー！」

「マジかよ…」

乗り気しないケイはとぼとぼ端末に向かつしかし端末のまえには…。

「ハッチ開放～！！」

クレアが元気良く端末を叩いていた。

「ちよーー！クレアーー？あたしまで宇宙へ放り出す気かーーー！」

ケイは慌て端末のある部屋に飛び込み、同時に後部のハッチが解放される。

「ばかやうつーー！殺す気かてめーーーー！」

ケイはクレアに走りその頭に拳骨を叩き落とした。

「エリス・クロード！トルネードガンダム2号機！発進しますーーー！」

エリスは開けられたハッチから宇宙へと出た。

「く…機体が重いッ…」

重力落下による身体の重みを感じたエリスは、シコミレーショント 現実とのギャップに感いをながらもペダルを踏み込み、スラスター を吹かせた。

「これで全部かな?」

ラナロウの前には、【ントナ】つ分の物資と2機のザク?を鹵獲していた。ムサイの下に取り付けられたコムサイといつ脱出用シャトルもスタンバイされておりなかには兵士が見える。

「セツカ…じゃあ…」

ラナロウはジオン兵士たちが乗る脱出コムサイを撃とびだスライフルを構えた。

「やめて……」

鋭い少女の声が、ラナロウの耳を震わし、それがラナロウの『仮』を一瞬 逸らした。

【ドキン…】

エリスの乗る2号機が1号機に体当たりし、1号機は空間に投げ出される。

「なにしやがる……てめえ…」

「早く逃げて下さ……」

ラナロウを無視したエリスは、声いつぱいに張り上げて叫び。エリスの声にジョンの兵士たちは慌て、コムサイにのりこみ発進してしまつ。

「てめえ……裏切りやがったのか……！」

ラナロウは怒りでビームライフルをエリスに向ける。

「わたしは裏切ってなんていません！あなたの行為は……」

【ズギュン】

ラナロウは容赦なくビームライフルを発射し、エリスは機体を横にずらしてビームをすれすれに回避する事に成功したエリスは戦慄を覚えた。

「な……なにを！？」

「裏切り者が！オレに説教たれんじゃねー！！！」

ラナロウは怒りで我を忘れていた。ビームライフルふを撃ちまくろエリスを攻撃する。

「2号機にショーンベン臭え臭いがついただろー？そのコクピットはビームライフルで除菌してやるよー！てめえ」となーー！」

支離滅裂な事をいいながらビームライフルを撃ちまくりガトリングガンを乱射する。

「二人の戦闘！終わりません！！」

シェルドが叫びに、一キはため息を漏らした。

「戦争は遊びではないといつて... ハリスー。わざと制圧しない」

ニキの命令を受けたエリスは一気に接近する。

「な..!」

驚くラナロウだがエリスは気にしない。

「この……わからず屋……！」

エリスのトルネードガンダムの回転回し蹴りがラナロウの「クピットを叩いてぶつ飛ばす。

「...」
ナニヤー

その時、ブリッジの通信副座席にいたレイチエルがレーダーを見て叫んだ。

「レーダーに感？まさか…」レーダーはもう一隻艦がいたところの…」

呼ばれて、一キはレーダーを確認に向かつ。

「… もちか……」

ゼノンが声を漏らして、一キ達は一斉に注目する。そしてこの宙域を思に出した。

「しまつたーー！」

ゼノンは慌てるよつて立ち上がり、レーダー画面を向ける。

「二人に高速で接近する氣鋭が有ります！速い…」

シェルズの声にゼノンは顔面蒼白となつた。

「それは【赤い彗星】だ！！一人を下がらせりやられやるや…」

ゼノンの声にブリッジクルーは一斉に騒めぐ。

「こいつ…舐めやがって…！」

ブリッジの騒ぎ等、知る由もないラナロウはエリスに「チームライフ」を向ける。

【エラボ】

同時に叫ぶ警報音にエリスは素早く反応した。

「ラナロウさん…！」

叫ぶが間に合わない。上から飛んできたのは炎の玉のようだった。

【ドーン！】

爆発と同時にラナロウのトルネードガンダムの右腕が大破する。

「ぐああ！！」

衝撃に声を挙げるラナロウ、エリスはすぐ様接近して1号機を掴み体勢を崩させないように引き寄せた。

「大丈夫ですか！？ラナロウさん！？」

「てめえエリス！やりやがったな！…よくも…！」

そこへニキからの通信に入る。

「二人とも落ち着きなさい！…新手よーー！」

「何いっ！？」

ラナロウとエリスは同時に上を見た。そこには赤いザクが1機、バズーカを片手に見下ろしている。

「白い奴の次は青い奴か…わたしは運がいい…」

赤いザクのコクピットの中で男はそう呟く。…そして

「見せてもらおうか… 青い奴の性能とやらを…！」

真っ直ぐに突っ込んできた、男の名前は【シャア・アズナブル】ジオンの【赤い彗星】とよばれるエースパイロットとの遭遇、エリスの人生で最初のピンチの訪れであった。

EP・4【赤い彗星】（前書き）

宇宙世紀0079へと介入したエリス達は、ジオン公国軍の部隊と遭遇し戦闘へと突入する。原因不明の頭痛に悩まされたクルー達は絶体絶命の危機に陥る。しかしジェネレーションフォースパイロット。ラナロウ・ショイドの活躍で事無くを得たと思われた……が……

EP・4【赤い彗星】

赤いザクは真っ直ぐブーストして突っ込んできた。

「ぐつ！」

エリスはラナロウの機体をブーストで押し出し、赤いザクを正面からぶつかり合ひ。

【ジオンー】

「が…………かはつ！…」

凄まじい衝撃がエリスの全身を打ち付け、エリスは肺から息を吐き出し、そのまま機体」と吹き飛ばされる。

「エリスーーー！」

ラナロウは叫び、残った左手から格納されたガトリングガンを取出し赤いザクに撃ちまくる。

「ラナロウ君気を付けて！…それはジオンの【赤い彗星】…エースパイロットよ！…」

一キの切羽詰まった声がコクピットに響く。

「見りやわかるよー！エリス！…起きろエリス！…」

しかしエリスからの返事はない。その間にもバズーカの弾をラナロ

ウの機体に放つザク。

「んな攻撃！！」

ラナロウは腹部の拡散ビーム砲を撃ちバズーカの弾を撃墜する。

「拡散するビームだと？…ねえい！」

シャアのザクは一気に下降してビーム火線を避けてラナロウに向かう。

「ち…エリス…と…と起きろ…やられちまつぞ…！」

「青い奴の片方は死んだか…ならば！」

一気に接近しようとするザクにラナロウは左手腕部ガトリングガンを撃ちまくり弾幕を開幕する。

「腕部にガトリングガンを搭載しているのか…白い奴とは違つな」

ザクは突然足のスラスターを使い高度を揺らめかせ、火線の下をくぐり抜けラナロウの機体に迫る。

「なめんなああああ！」

ラナロウの機体は潜り抜けてきたザクへと蹴りを放つがそれも避けられ、ザクはヒートホークを引き抜いて振り上げる。

「んなつ…！」

ラナロウの顔が驚きに見開かれる。

「終わりだ！！青い奴！！」

振り下ろしそうとするヒートホーク、しかし：

【パンパン】

弾けるような音を鳴らすアーラート音、シャアは目を疑つた。

「何ー？」

そこには猛スピードで脱出シャトルが突っ込んできていた。

「ええいー！」

シャアはラナロウに振り下ろしそうとしていたヒートホークをシャトルに振る。シャトルを破壊する。

「このやつおおつーー！」

ラナロウは再びガトリングガンを撃ちまくれば、シャアのザクは距離を取り当たらない。

『ラナロウー、距離を取り時間稼げーー！』

ラナロウの耳にマークの声が響く。見れば一人のパイロットスース

がザクへ向かっていた。

少し前

「赤い彗星と遭遇しただと……？」

マークはモニターに映されたゼノンに向かって叫びマリアに抑えられる。

「今はラナロウ君が交戦してる」

「ならなんで援護しない！一人はまだ宇宙での戦闘はシユミレーシヨンしかこなしてないんだぞ！？勝てるわけがない！…」

「マーク！！」

マリ亞はマークを黙らせさせゼノンを見た。ゼノンは首を横に振る。

「相手は赤い彗星だ、こんな戦艦などではすぐに撃沈させられてしまうだろ？艦は動けん」

「なら！一人を見捨てるのはどうの？…ふざけるな…！」

マークは柄にもなく怒鳴りたててモニターを叩く。

「艦長ーあきらめぬにや速にゼーー！」

そこにケイが割り込む。

「どう書いとだ？ケイ

マークは椅子に座り聞く姿勢になる。

「簡単で、ラナロウの破壊したムサイの近くには物資とザクが2機漂つてゐる…」

マークとマリアは顔を見合させる。

「…しかし、どうせいつそこまでいくの? こま一入と赤い彗星は交戦してゐんでしょう?」

マリアの不安な表情をみたケイは不気味に笑った。

「脱出用のシャトルは用意した…後は当たつて碎けろ? オーバー? モニターで出しておられたシャトル、マークはそれを見るなり立ち上がる。

「マーク! ?

動搖したマリアは立ち上がりマークを止めようとする。しかしマークは何も言わない。

「わかった…付き合いますよ! 」

マリアは意図を汲み取り溜め息を吐き出した。

「よし! 行くぞ! 」

場面は戻り

「時間稼ぎつたつてよ……オイコウ……エリス……！」

ラナロウはガトリングガンをばらまき、高機動で動き回る赤い彗星のザクを追い掛けた。

「済まないなマリア、特使の君を戦わせる事になるなんて…」

マークはザクの「クピットでパラメーターを調整しながら咳いた。

「もう慣れましたよ、軍の時からあなたはいつもやうでしたから…」

マリアは既に調整を済ませ起動のタイミングを伺っていた。

「起動と同時にバー二ア全開」

「タイミングは任せます」

マリアはヘルメットの無線を聞きながら目を閉じ、集中する。

「早くしてくれーもう…」

そんなラナロウの足をシャアのザクが放つたバズーカが吹き飛ばす。

ラナロウの機体が大きく揺れて飛んでゆく。その時、シャアは戦いながら考えていた。

「……先程の無人のシャトルは一体なんだつた？」

シャアは自分の経験から答えを探す。

「わたしの機体にダメージを『え、鈍らせるための攻撃?』

最初に頭に浮かんできた作戦を口に出す。

「否 違うな、それならばシャトルに爆薬を積んでいる筈だ……」

次に目の前を飛びかう半壊状態のトルネードガンダムを見る。

「あの機体を逃がす為のブリッフとは考えられん……」

そしてそのモニターの端にザクが映る。

「まさかっ……!?

「いまだ……!」

同時に2機のザクが起動し、ランドセルのバーニアを全開に真っ直ぐ進む。

「ちー！やはりかー！」

シャアはバズーカを2機に放つた。轟音とともに迫る火の玉。

「マニア・フォーメーション・マークスクリュー！」

「了解！」

マリアとマークのザクは背を合わせクルクルとローリングをし始めるとそのままバズーカの弾を弾いて避け、弾かれたバズーカは空間で爆発しその威力で2機のスピードが増す。

「バカな！？バズーカの弾を弾くだとつ！？」

驚きに皿を見開くシャア、その間にマリアとマークのザクは回転しながらシャアへ迫る。

「背中を借りるぞマリアー！」

「ア解どつぞー！」

息のあつた二人のザクは少し離れ、マリアのザクが減速し、マークのザクはマリアのバーニア、文字通り背中を蹴り、離れる。

「困む気かー？やられるとかー！」

シャアの視線はマークに向かつ。

「マリアー！」

同時にマリアのザクがマシンガンを放つ。

「何ー？…」

不意を突かれたシャアだったが、両足のバーニアを使い体を回すようにしてマシンガンを右足に擦らせて避け、バズーカをマリアのザクに向ける。

「いいちだー！」

そこでマークのザクが背後から体当たりをぶつける。

【ジョン】

激しい衝撃にシャアのザクが吹き飛びコクピットのシャアに凄まじい衝撃を浴びせる。

「味な真似をッ！」

シャアのザクは判定せず前にいるマコアに向かって進み、ヒートホークを振り抜いた。

「マコアーー！」

完全に不意をつかれたマークは出遅れる。

「バカに……するなああーー！」

マリアのザクはマシンガンを捨てて正面からシャアのザクに迎え撃つ。

「マコア止せーーーーーーーーーーーーーー！」

マークの声を耳にするも、マリアのザクはシャアのザクに組み付いた。

「ええい！－何の真似だ！？」

動搖を見せるシャアだつたが、直ぐに組み付いたザクを剥がそうとする。しかしざくは離れずバー二ニアを全開に聞く。

「バー二ニアを開いた！？やつめ…道連れにするきかー？そやはいかん！！」

エリスは、うつすらと目を覚ました。急にザワザワとした胸騒ぎがしたからだ、モニターを見る。赤いザクと緑のザクが組み付いて光っている。それがバー二ニアの光である事はすぐにわかつた。何故？エリスは虚ろな意識の中で思う。しかし頭が痛い。見れば重力で自分の血が舞っていた。頭を打ったのだ…そうエリスは思った。

『起きなさい…エリス』

暖かい女の声が耳に響いた。

「だれ？」

エリスの視界がぼやけ、そこに女が現れる。俄かに信じがたい怪現象に、エリスは目を凝らすが、女は幻ではなかつた、モニターに写し出されているのだ。

『わたしは…【アプロ…】…ジエネレーション…の端末…』

ぼやけた画面の女の声は、エリスの耳には聞こえなかつた。しかし…はつきり聞こえた言葉がある。

【あなたに種を授けましょう】

マークの声でエリスは現実に突き戻される。同時に緑のザクが赤いザクに斧で両断され、光のたまになつた。

「うれしうらやま」

マークの声と共にもう1機のザクが向かって行く。

「あつね… わんが？」

エリスの胸を凄まじい痛みとマークの憤りの騒つきが駆け巡る。そして、マリアの顔が走馬灯のように流れ、エリスの瞳から涙が溢れた。

「好好的！」

怒りに身を任せたマークはヒートホークを振り抜きシャアのザクに斬り掛かる。しかしシャアのザクは素早く身を横へ反らして後ろに回る。

「しまつた！！」

マークにはスローに映る、赤いザクがマシンガンをホルダーから外して構える姿が。

途端、動かなかつたエリスのトルネードガンダムが動き、バーニアを全開にして一気にシャアのザクに迫つた。

「なに…？」

完全に不意を突かれたシャアは見事にエリスの体当たりを受ける。

「青い奴が生き返つただと…ぐ…ええい…！」

衝撃緩和のエアバックが顔に直撃するもはねのけ、エリスを引き剥がそうとする。

「お前なんか！お前なんか！！！お前なんかあああ…！」

その瞬間、エリスの頭の中で種が弾けた。

エリスのトルネードガンダムは自らシャアのザクを厭い、厭い拵つたザクのバックパックを掴んで振り向かせ、手にしていたマシンガンを掴んで奪つて投げ捨て、ヒートホークを抜くしのザクの手首を掴んでそのまま握り潰し、そしてシャアのザクの頭に拳を打ち込み掴んで排気管を引き契る。

「…」いつ…急に動きが…！…

シャアは苦し紛れにトルネードガンダムから離れようとすれば、今度は「クピットめがけて蹴りがとんできて直撃する。

「うわああっ…ば…化け物か…？」

シャアのザクは解放されて空間を飛んでいき、それから反転すると、
一目散に逃げていった。

「逃がすかあああーー！」

エリスはビームライフルを引き抜き、シャアの逃げた方向に撃ちまくつた。

「エリス！！」

そのモニターにマリアが映る。

「え？」

啞然とするエリス、モニター越しにマリアは健在を見せていた。

「なん……で？」

「ザクを捨てて脱出したのを……じこつ」

モニターのマリアの隣でラナロウが頭に腕を組んで寝ていた。

「バカかお前……！」

マークが無線に割り込み、怒鳴った。

「それよつエリス！…あの赤い彗星をボコボコにちぢめうなんて凄いわよ！」

「マリアは興奮した様子で、モニターに顔を寄せる。

「え？…いえ、もう無我夢中で…」

「諸君話はそれくらいで良いかな？」

そこにゼノンの通信に入る。

「赤い彗星は去ったにしろ、まだ付近にジオンや連邦がいるかもしけん…速やかに機体と物資を回収し…この場を離脱する！いいな！」

「「了解」」

こうしてエリスの人生最初の危機は去った、しかしこの危機はあくまで最初に過ぎないのだった…。

EP・5【サイドフ】（前書き）

エリスの活躍によりシャアを撃退する事に成功したジェネレーションフォースは、RX-78ガンダムの最終調整が行われていた旧コロニー【サイドフ】を目指した。

EP・5【サイドフ】

赤い彗星との遭遇から2日。エリス達ジエネレーションフォースは、サイドフコロニーの跡地に向かつ道中にいた。

サイドフとは、IJの時代における技術の結集した機体【RX-78-2=ガンダム】が最終調整のために搬入されたコロニーであった。が、その後にジオン軍の襲撃により破壊され、宇宙に漂つ「ミミ」となつた。

「何故、そんな場所に行くんですか？」

エリスは説明の最中一キに対し質問した。エリス達パイロットは、今後の目的を聞くべく、ブリッジに集められていた。

「オレも疑問だな、もうガンダムはないんだろう?」

隣で気だるそうに椅子に座っていたラナロウも疑問を投げ掛けた。

「ラナロウさん…また海賊みたいな…」

「あー…うるせえうるせえ…もうしねえよ…しねえ…」

エリスに咎められたラナロウはうんざりした様子で手を振った。ラナロウはエリスを仲間として認めたらしく2日前のような刺はもうなかった。

「その解答は間違つてこらとしたりびつする?」

二キは意味ありげな笑みを漏らして索敵モニターとなるテックに脇に抱えたファイルを置いた。

「このコロニーにはもう一機、ガンダムがいた…しかしジョンの兵士の自爆攻撃によりコロニーの外へ投げ出された、ガンダムタイプの装甲だ…ザクの爆発程度ではダメージにならない。」

「じゃあ俺達はそのガンダムを回収しに?」

マークは鋭い目付きのまま二キを睨んだ。二キは自信のある表情で頷いた。

「モニターを見て」

二キは指し棒を手にして大型モニターの横に立つ。

「これが、我々が回収するガンダムタイプだ」

モニターに写し出されたガンダムは、黒い装甲に中距離戦を模したような設計が為されていた。その証拠に、右肩にはキヤノンが取り付けられている。

「JGのガンダムは、RX-78-1、ガンダム試作実験初号機の改良型、ヘビーガンダムという

二キはガンダムの要所に指し棒で差しながら説明を続ける。

「なんか…ガンキヤノンみたいですね…弱そうだわ」

マリアは小さく愚痴を漏らした。

「だが、いま俺達にはザクとトルネードガンダム1機しかない。現状はザクよりも優秀なのは確かだな」

マークは的確に現状を覚り一キに肯定の姿勢を見せる。

「マーク、我々がこの機体を回収するのは戦力の強化が目的ではないわ?、この機体をジオンにも連邦にも渡さないことにするためよ」

一キはセツツアイルを開く。

「黒歴史のデータによれば、この機体は地球連邦軍により回収されて強化され、フルアーマーガンダムとして戦地に投入されて多大なる戦果を挙げるわ、それを防ぐため、ヘビーガンダムは回収、又は破壊する」

一キは長い台詞をいい終えた役者のように息を落ち着かせる。

「既に地球連邦軍のサラミス級戦艦が、ヘビーガンダムを回収に向かっているわ…戦闘にならなければ良いんだけど」

「そりや無理だろ!」

操舵桿を握るイエーガーはその場で声を挙げ。全員がそちらに集中する。

「サラミス級の索敵能力は甘く見れない…それこそこのおまちちゃんは(キャリーベース)は目立つからな

イエーガーの意見にマークも頷く。

「先撃ちで叩くしかないか…」

マークの言葉にエリスは前に出る。

「そんな…ウォーズブレイクするかも知れないんですよ…。」

「するだらうな

マークはエリスの言葉を真つ二つに切り捨てた。

「え…？」

エリスは啞然と口を開けた。しかしマークは表情一つ変えない。

「只でさえ後に暴れるヘビーガンダムを奪うんだ、回収に来た奴ら
だってフルアーマーガンダムの開発に携わる奴らなはずだ、フルア
ーマーガンダムをこの歴史から消そうとしてるんだぞ？間違いなく
ペナルティとなる…」

マークの言葉に今まで沈黙していたゼノンも口を開く。

「ある程度は敢えてウォーズブレイクさせて月光蝶の刺客を仕留め
るのも我々の仕事もある」

ゼノンは重みある言葉にエリスは脱力して椅子に座った。

「そんな…」

「おめえは『氣』にする必要ねえよ」

ラナロウは独り言の呟きで呟いた。

「討つのはオレがやる、だからお前は『氣』にすんな……」

「……」

エリスは黙り込み、重苦しい空氣が流れる。

「取り敢えず、食事にしてましょ」

一キは時計を見てからゼノンに田配せすれば、ゼノンは頭をかきながら頷き、その場は解散した。

「エリスさん、平氣？」

マリアが隣にやって来た。エリスはいまだに困惑の表情を浮かべている。

「……はい」

その声に力は無い。何処か上の空だった。

「行くぞエリス！」

そんなエリスをラナロウが無理矢理立たせて押し出すように食堂へ

向かった。

それから数時間、特に何もない時間が過ぎた。エリスは、トルネードガンダムのコクピットの中で、趣味の読書をしながら、ふとこんな時間が何時までも続けばいいと思つていた。

そう思つもつかの間である。

【各員に通達、各員に通達…本艦はこれより、サイドフュード域へ入る、本艦はこれよりサイドフュード域に入る！バイロットはドックにてパイロットスース着用し待機せよ…繰り返す】

「もう着てるよ…」

エリスは二キの通達を危機ながら座席に持ち込んだ栄養剤を口に含む。

「エリス」

そこへマークがやつってきた。

「はーはーはー…」

エリスは慌て立ち上がり狭いコクピットの天井に頭をぶつけてしまう。

「なんだ？エロ本でも読んでたのか？」

「わたしは女ですっ！！」

エリスは一気に怒鳴りたてる。するとマークは腕を組み唖然とする。

「せうか？女だらうが年頃なら、工口本の1冊や2冊へりこ……」

「持つてません！――だ――だだだ！大体わたしは15ですよ――？買えるわけが――！――大体！なんでわたしがそんないかがわしい本を……」

ムキになつたエリスはまくし立てながらも想像してしまい赤くなる。

「いいね～思春期

「茶化さないでください――！」

エリスはあくまでも食らこ付くも、マークは軽くあじりひとつ。

「マコアなんて軍学校の頃は大量の工口本を持つてたぞ？男同士の…BLもの？」

瞬間エリスの表情が固まる。そして一気に真っ赤になつた。

「… ももー持つてませんよ！？持つてませんからね――」

エリスはリングのように真っ赤になりながら凄まじい反応でマークを殴りつけた。

「まつまつは！痒いかゆつ……」

余裕の笑みを浮かべていたマークの側頭部にバールが直撃し、重量の力にまかせてマークが飛んでゆく。

「なにいってんだくおらあ――！」

下からマコアの雄叫びのような声が聞こえてきた。

「冗談だよ…」

空間で反転してコクピットに戻つてくるなりマークは急に顔つきが
変わる。

「エリス」

「…はい」

エリスは落ち着いてパイロットシートに座りマークを見上げる。

「今回、戦闘になつたら…おまえはガンダムの回収を優先しろ」

マークの言葉にエリスは呆然とする。

「え…？でも…」

エリスの言葉をマークは口に指を当てて防ぐと、マークは顔を左右
に向かた。

「今日は艦隊との戦闘になる。」

「わかつてます！だつたら数が多い方が…」

エリスは反論しながら氣付き言葉を止める。

「昔のサラミス級は装甲なんて皆無だ、トルネードガンダムのビームライフルなんて当たら吹き飛ぶのは砲座だけじゃ済まない…殺したくないんだろ?」「

エリスは無表情のまま頷いた。マークはエリスが納得するのを確認すると表情を崩した。

「回収にはラナロウも付けるから心配するな

更にエリスは疑問を浮かべた。

「何で…」

するとマークは不適に笑う。

「ここは数日前まで人が生活してたんだぞ?当然中には逃げ遅れた奴らもいるだろ?…そしたらどうだ?報われない彼らの魂がいまも

「ひやあああああつ…」

エリスはその手の話は滅法嫌いだった顔を恐怖に引きつらせコクピットから出たがる。

「じょ!冗談冗談!…落ち着け!…」

マークは恐怖で涙目になるエリスを抑えてコクピットに押し込んだ。

「夜トイレに行けなくなるじゃないですか！？」

エリスの悲痛な叫びにマークは頬をかく。

「携帯用のオムツあつたかな」

「エリスからでていけ――！」

エリスはマークに体当たりを食らわせ一緒に外へ出る。

「何やつてんだ？…」

パイラットスーツに着替えたラナロウは渋い表情で一人を見た。

「ラナロウさん！」

ラナロウを見た途端に抱き付くエリス。

「んなーなにしゃがるテメー！――はなししゃがれ――！」
ラナロウはくつ付くエリスを引き剥がそうとするがエリスはくつ

いて離れず、面倒になつたラナロウはそのままマークを睨む。

「こやな？」「靈が出るかもつてな？」

するとラナロウも口端を引きつりせる。

「ちよつ…まじつか…」

真面目に反応するラナロウにマークはしまつたと言ひ顔をする。

「まで…お前そういうの平気なはずじゃ？」

「駄目に決まつてんじゃ ねえですか！！聞いてねえぞーー！」

「ラナロウは真剣にビビッた様子で怒鳴った。

「お前そつこいつキャラしてねえだろーー外見的こ

「外見で考えんなよ外見でーー！」

ラナロウはエリスに顔を向ける。

「エリス！武器倉庫行くぞーー拳銃だけじゃだめだー！バズーカ持つてこようぜーー！」

完全にビビッたラナロウは真面目に叫びエリスも肯定する。

「わたしも持つて行きますーー！」

「ああーー一人で持つてこうーー！ガンドームなんか木つ端微塵にしてやるぜーー！」

「オレが悪かったーー！」

マークの声に一人は我に帰り、そこにマリアがやってくる。

「何してるんですか？」

マリアは左右に首を振り双方を見つめ首を傾げた。

「それが…」

H里斯はマリアに事の次第を伝えた。

「亡靈なんかいるわけないじゃないですか…馬鹿ね」

マリアは穏やかに笑い飛ばす。

「でも、亡靈はいなくとも仏様が沢山あるのは確かね…そんな所に女の子を一人で行かせるのは確かに可哀想ですからね」

マリアはそう言いつながら、ラナロウに顔を向ける。

「H里斯さんを確りよろしくね？」

ラナロウは小さく頷く。

「最善は及べず」

「あと…」

マリアはラナロウの足元にめを送る。

「バズーカはいらなからね？」

ラナロウの足元にはいつの間にかバズーカがあった。

「…うあ

【ブリッジよりトルネードガンダム、ブリッジよりトルネードガンダム…発進準備を】

そこにニキの声のアナウンスが鳴り一人は顔を見合せコクピットに入る。

「おい

ラナロウは不満げな声を漏らす。

「なんでオレが操縦じやねえんだ?」

ラナロウの言葉にエリスはそっぽむく。

「不満なら1号機にどひづぞ?」

1号機は現在脚部を交換されており、足が無い。

「ぐぬぬ!..

ラナロウは我慢して後部の副座席に座った。そこにはニキからモニター通信が入る。

「エリス? 聞こえる?」

ニキは怪訝な顔で通信モニターへと映る。

「はーはー、大丈夫です」

ラナロウは後ろの座席から顔を出す。

「あれ? なんでラナロウ君までいるの?..」

「ナロウを見た瞬間、キは驚きを浮かべた。

「隊長からの命令つす」

「ナロウが言えば、モーター横からクレアの顔が現れる。

「ダメダメナロウ！なんで後部座席なのぞー。」

クレアは見るなりそんな事を言つてきた。

「は？」

「ナロウもエリスも顔を見合せた。

「普通はナロウ君が操縦でしょー！？」

その言葉にエリスは口を開けて睡然とし、ナロウは嬉しいのか立ち上がる。

「だよなーーおらーーエリスを」じけー。」

しかし、クレアはまだとまらない。

「で~エリスはその膝の上にしゃって~」

クレアはゼノンの膝の上に座る。

「エリスはオレが守るーなたちやつてー。」

「わいり~…エリス、後部座席でこいや。」

「はい、わたしもそれがいいと思います」

二人は息ピッタリに無線を切り、後部ハッチに向かった。同時にシエルドの顔が映し出される。

「後部ハッチを開くぜ」

「お願いします」

そして鈍い音と共にドックの後ろに付けられた後部ハッチが開き、デブリの漂う宇宙が広がった。

「トルネードガンダム、エリス・クロード、ラナロウ・ショイド行きます！」

エリスとラナロウを載せたトルネードガンダムは後部ハッチから宇宙へ飛び出した。

そのころ ブリッジでは。

「地球連邦軍の姿が見えないわ……」

二キは腕を組み顎に手を当てて考え込んでいた。

「もう回収されちゃってんじゃねーか？」

操舵席に座るイエーガーは欠伸交じりに呟いた。

「いたとしても、こう熱源がおおくちゃなー……」

シェルドも頭に手をあてお手上げの様子でいった。

「やうよね……」

「キモーターに広がるサイドの残骸とトブリ郡を見つめた。

「つづん……いるよ

そんな時、クレアが寝ているゼノンの膝にちょこんと座つたまま亥
いた。

「……え？」

「キは驚きそちりを見る。クレアはクスクスわらいながら。

「せりへー・ローラーそばに光るもののが…なんぢやつてー

クレアとしては冗談だった。しかし…

「でかしたはクレアー！ シェルド！ 最大望遠ーー！」

「え…？」

「あいあこせーーー！」

シェルドは元気良く声を返す、そして最大望遠でクレアの言つた座
標を移せば、そこにはサラミス級戦艦が2隻いた。

「ええーーー！」

驚きのクレアだったがそんなクレアをゼノンは膝から退かした。

「これはチャンスだ…本艦はエンジンを停止し…」

突然の指示にブリッジクルー全員が顔を向ける。

「これだけデブリがあれば、動いていた方が目立つ…マークを発進させよ！一気に叩け！！」

二キは通信インカムを手にした。

「ザク…!…発進準備…！」

二キの声を聞いてドックに待機していたマークはザクへ向かう。

「マーク、油断大敵！」

マリアにいわれたマークはヘルメットを被る。

「たかが戦艦2隻にオレがやられるかよ、お前はブリッジででも行つとけ」

マークは自信有りそうに呟き、ザクのコクピットへ映る。

「コクピットに座るとケイから無線が入る。

「ザクの出力を少し弄って、機動値を上げておいたぜ

「まづ

マークはコクピットシートの脇からキーボードを取り出し、ザクの変更点を確認する。

「十分だ、ありがたいぞケイ」

ケイは照れ臭そうに鼻をかく。

「なあに、隊長さんの機体だかんな……角も欲しかったか？」

「ん、次回からは付けてくれ」

その隣にマリ亞が映る。

「本当にザクで平氣?」

その表情には不安が伺える。

「ああ、ヒリストザクは扱えん……それにオレは……」

マークは言葉を濁らせ格好をつけた。

「超強いからな！」

そんなマークの言葉にマリ亞はジト目になる。

「なら、さつさとカラミス位やつつけできなさいよ」
マリアに背中を押されてマークはゆっくりとカタパルトへ向かう。

『マーク聞こえてる？出撃よ？』

痺れを切らした二キがモニター越しに現れた。

「わかつてゐるが、エテ男は忙しくてなー」

マークはそう笑いながら「クピットでの最終調整に入る。

「シェルド、バズーカとシュツルムファースト、あとマシンガンを
くれ。弾倉は二つ」

「はあ！？ そんなに！？」

二キからシールドに切り替わり、シェルドはカタカタタイピングし
はじめた。

「座つてるだけなんだから文句たれるな」

マークもキーボードを叩いてザクに装備を設定していく。装備を付
け終えた所でキーボードをしまい、次にレバーを握り座席を合わせ
る。

「よし、マーク・ギルダーだ！ ザク！ 発進する！」

マークはカタパルトを使わずに開けられたハッチからゆっくりと出
ていった。

「艦長…」

丁度その頃、ナウリス級の部隊は望遠モニターでガンダムを探していた。

「どうした?」

モニターを見ていた隊員に言葉を返す艦長、しかし隊員は首を傾げる。

「あれ?…」

そんな中途半端な解答に艦長の男は侮蔑の表情を浮かべた。

「用が無いなら呼ぶな! ガンダムを探せ!…」

モニターの隊員は艦長に怒鳴られ疎み上がる。

「ひつ…すこません!」

そして…

「…いま…ザクが見えたような気がしたんですね…まあ…つかれてるんですね…」

そう、隊員は小さくため息を漏らした。

「…バレて無いようだな」

マークはエンジンを切り、空間の流れに合わせてサラミス級へと近づいていった。むくじゅく…蛇のよう。

その頃エリス達は…

「ガンダム…ありますんね…」

「ああ…」

トルネードガンダムで空間を漂い、低出力のバーニアを吹かして、漂っていた。

「敵も見当たらねえな、好都合つちや好都合だな」

ラナロウはホルスターから拳銃を引きぬきいつでも戦える体勢を整えた。

「ラナロウさん!」

エリスが声を荒げ、ラナロウは顔を向ける。その先にはデブリに漂う。ガンダムの姿がそこにあった。

「艦長…」

サリマス級の隊員が叫ぶ。

「どうした…」

艦長の男は状況もつかめぬまま返す。そのモーターにはザクが漂っていた。

「なんだ…ザクではないか

艦長は呆れたよつに声を漏らした。

「はい、外傷は見られませんが…機能はしてないよつですね…」

「放つておけ、我々は宇宙人の扱う機体等最早必要ないのだ！早くガンダムを見つけよ」

そのザクにはマークが乗っていた。

「お優しい艦長殿だ…しかし、お陰で仕事が…楽に済みそうだ！」

マークはサラミス級が隣をする違うその瞬間、ペダルを踏み込みバーーアを最大に開く。そして態勢を切り替え右手のバズーカをブリッジへ向ける。

「なつ…」

驚きに目を向くサラミス級の艦長だったが、その瞬間、ザクのバズーカから撃ちだされた火の弾が、サラミス級のブリッジを焼き尽くした。

「何事だ！！」

隣を飛んでいたサラミス級の艦長が叫ぶ。

「ザク！ザクです！！味方からのシグナル途絶！！」

「なんだとお……」

マークはブリッジを失い身動き出来ないサラミスにシユツルムファーストを打ち込み、シユツルムファーストの炸裂と共にサラミス級は光の中へと消え。そのまま真っ直ぐにザクが突っ込んで来る。

「ザク！来ます！！」

「脱出すら認めぬか……おのれジオンめ……撃墜しろ……」

サラミスはゆつたりと砲座を回し横向きからマークのザクにビーム砲を撃つて来た。

「射撃角度が甘いな……」

マークはスラスターを調整しつつ軌道をずらし、ビーム砲を紙一重にすり抜け接近する、そしてバズーカを構え放つ。

【ドホン！】

エリスとラナロウはトルネードガンダムから降りて、宙域に漂うガンドムタイプの「クピットまで来ていた。

「燃料はあるみたいですね……」

「それに全くの無傷だ…流石はガンダムタイプだな」

「ガンダムのコクピットハッチの上に乗り、外からコクピットを解放する方法を探す。

「でも…なんでエネルギーがあるのに動かないんですかね?」

「地上用だからだろ?スラスター・パックが付いてない所を見ると、つける所で襲撃を受けたんだろうぞ」

ラナロウは「クピットハッチ横に端子の差し込み口を見つけてエリスを招き寄せる。

「パイロット…生きてますかね」

「生きてたら死んでもうつか仲間になつてもうつかだな…」

ラナロウは真顔でそう呟き、エリスも頷く。

「仲間になるヒトならいいですね…」

エリスは携帯にた端末から端子を引き抜き、差し込むとコクピットを開放する。そしてラナロウと顔を見合わせ、二人でコクピットを覗き込んだ。中には…

「エリス…！」

「え?… キヤア…！」

ラナロウはエリスの手を掴み引き寄せた。

【ドホン！】

そのまま後ろに銃声が響き、エリスのヘルメットを銃弾が擦った。口クピットの中にいたパイロットからの銃撃だった。ラナロウは咄嗟に拳銃を抜いて身を乗り出した引き金を引いた。

【ドン！…ドンドンドン！】

放たれた弾丸はパイロットの銃を弾き、身体を抉り、頭部を撃ち抜き貫いた。

「う…ラナロウ…さん」

「エリス、口クピットに戻れシートに座るまで…決してこっちを見るな」

ラナロウはエリスの身体を引き寄せ、背中を押して口クピットの方に飛ばし、口クピットの中のパイロットを外に出して蹴り飛ばし口クピットに入る。

「大丈夫ですか？ラナロウさん」

「クピットに戻ったエリスはラナロウに通信を送る。

「駄目だな…完全に駆動系がイカれてやがる…ガンダムで運ぼう」

ラナロウは口クピットからでてトルネードガンダムの方へやつて来ると、エリスは手を伸ばしてラナロウを掴み口クピット内に招き入れ「クピットハッチを開めた…その時。

「ラナロウさん…」

「あん?…」

エリスは太陽の方に輝く蝶の羽を見つめていた。

「うわあああつ…」

場面は変わり、サラミス級のブリッジをバズーカで吹き飛ばしたマーグもそれを見ていた。

「…ウォーズブレイクか」

キャリー・ベースの中でも確認が為される。

「なんだ…ありや」

シェルドは田を見開き、一キほゼノンに身体を向ける。

「…ウォーズブレイクだ…」

ゼノンは田を閉じて告げた。格納庫にいたマリアはケイの隣に行く。

「どうしたんだい少佐どの?」

ケイはマリアにきにせず端末を操りトルネードガンダム1号機の修理を進めていた。トルネードガンダムは予備のパーツが足りず片足

が無い。

「ケイ、お願いがあるの…」

「はあ、なにかな？」

ケイは目を細め顔を向ける。

「「」の子を出れるようじって？」

「一弾機をか！？」

ケイは驚きを顕にして、身体を向ける。

「無理だ！片足じゃバランスが取れねえのー！」こつこつせせねえよー！
！」

「なら松葉杖でも片足に取り付けて艦のカタパルトにいれればいい
わ機銃変わり位にはなるー！」

マリアはさらにまくしたてる。

「ウォーズブレイクしたの！何が来るか分からんだったら…戦
力は1機でも多いほうが多いでしょー！」

「わかったわかった！予備のザクの足を付けとくよ…」

マリアの勢いに負けたケイは端末を操りだした。

「さあ…何がくる?」

機銃やブリッジを失ったサラミスを背後に放置し、蝶の翼が消えるのを待つた。するとその方向から2隻のマゼランとサラミスが浮かび上がった。

「たつた戦艦2隻?…」

マークは拍子抜けして安心する。

『此方は地球連邦軍115艦隊ホークアイから、ジオン軍に通告する。武器を捨てて投降せよ、繰り返す。武器を捨てて投降せよ』

「…月光蝶の尖兵じゃない…」

その瞬間マークの背筋を寒気が駆け抜けた。

『投降の意志は無いようだな…これより撃墜する…』

その瞬間、マゼラン級戦艦は背後から飛んできた巨大なビーム砲により蒸発し、マークのザクにも迫る。

「……」

マークは慌ててスラスターを吹かせ、上昇することですれすれで避ける事に成功する。ビーム砲は背後にあつたサラミスをも吹き飛ばし蒸発させた。

「なんだありやあーー！」

イエーガーは驚き声を挙げた。

「ショルドー最大望遠！！」

「今やつてるよーー！」

シェルドが最大望遠にモニターを切り替えれば、台形のよつた形の物体が太陽から此方に向かって来ていた。

「なんだよこいつは……」

マークもザクのモニターから見ていた、白く大きなそれは背後からサラミス級に攻撃を仕掛けた。

『なーー？なんだこれはーー』

『撃てつーー落せーー落すのだーー』

サラミスの乗組員らの声が響き、サラミスは急速で回頭しながらビーム砲を乱射する。しかしビーム砲は巨大なそれに直撃するも球体のような見えないバリアに弾かれ分散され、そしてそれは下部に取り付けられた一本の腕のような物を展開し、そこから巨大なビームサーベルが生え、そのままサラミスに向かう。

『ビームが効かないーー？』

サラミス級はビームサーベルにより真っ一つにされ、爆発した。

「なんついく...」

見ていたマークは驚きに目を見開いていた。

ପ୍ରକାଶକ -

ブリッジにやつてきたクレアが叫びモーターにへばりつく。

「クレア！あれが何か分かるの！？」

一キは慌てて聞くとクレアは身体を向ける。

「何つて…デンドロだよー、デンドロー、GP、O3Dーー。」

「なんつ……だとお~!?

「艦長!! ガンダム試作二号機だ!!」

ラナロウからの無線がブリッジに入る。

「ラナロウ君？ ガンダムは？」

ニキに聞かれたラナロウは頷く。

「回収は終了した」

「良かつた……なら早く戻つて」

「一キとの無線が切れ、エリスは操縦桿を握る。

「ガンダム試作三号機つて？」

エリスは隣から焦るラナロウに聞けばラナロウは小さく頷く。

「宇宙世紀0083で実際に使われた兵器だ……」

ラナロウは嘆息を漏らすと、エリスは頷く。

「あんなものが相手じゃマークさんが……」

「ああ……急ぐぜ……」

「艦を前に出せ」

エリスは領き、ガンダムを抱えたままバーニアを吹かせた。

艦長であるゼノンは一キに命令を告げる。

「あんなのに見つかったりしたら」「んな船直ぐこ……」

「一キはサウミスを破壊して獲物を探して巡回する『ソードロボット』を指差した。

「見付かるのは時間の問題だ……」
「見付かるのは時間の問題だ……」
見つかったら満足に回避も出

来ないぞ！」

ゼノンの言葉に一キは汗を垂らし緊張を顕にする。

「マーク聞いた？」

無線でマークに告げれば、マークがモニターに現れる。

「ザクに陽動を期待すんなよ……だが、今はそれしかないな」

エンジンを切っていたマークは身を乗り出してレバーを握る。そして…

「ち…エリス！ オレを降ろせ」

ラナロウは急に身を乗り出した。

「え…？ なに…」

「オレはあっちのガンダムでキャリーベースにいく…おまえは隊長の援護にいけ！」

「ですが…あのガンダムは駆動系が…」

するとラナロウはヘルメットを寄せてエリスに顔を近付ける。

「行け…」

ラナロウはそりこつて座席のボタンを操りコクピットハッチを開き

外へ出た。

「ラナロウさん！」

「後で会おう！」

ラナロウはヘビーガンダムに乗り込み、コクピットを閉じた。

「行くぞ！――」

マークはエンジンを掛けながら一気にスラスターを開いて動けば、デンドロビウムは素早くザクを察知して身体を向けようとしているがその間にマークは背面に回り込む。

「食らえ！――」

バズーカを構え、バーニアの一つに向かい放つ。

「キャリーベース発進！――」

ゼノンの一聲でキャリーベースは動き出す。

「艦長！」

マリアがモニター一杯に現れる。

「どうしたのかね？マリア君」

「トルネードガンダムを私にお貸し下さい！機銃交換にはなって

みせますー。」

マリアは熱意ある眼差しで叫び、ニキは心配な顔で田を向ける。

「『号機は足がないはずだが?』

ゼノンも怪訝そうな表情を浮かベニキも頷く。

「ケイに頼んでザクの足を着けました。カタパルトデッキでの戦闘位ならできますー。」

マリアはモニターを叩かん勢いで叫んでいた。

「良かれつ……好きにしたまえ」

「艦長ー。」

「ニキ君…」

ゼノンは首を横に振り、それを見たニキは大きなため息を吐き出した。

「行きなさい…」

「了解ー。」

【ドォンー】

マークの放ったバズーカの弾は、テンドロビウムのバーニア上の装

甲に当たり弾かれた。デンドロビウムが激なローリングをしたからである。

「ちー！旋回が早い！？」

ザクはその側面に付きまとい、2発3発とバズーカを打ち込むが、デンドロビウムの装甲にはびくともしない。

「化け物めつ！」

そうしてみると、デンドロビウムは急に進路を変える。

「なに……」

マークはその先に田に向ける。そこにはキャリーベースがいた。

「キャリーベース逃げる！…デンドロビウムが行くぞ！…」

マークは無線に叫びかけた。

「わかつてゐるわ！」

二キは焦つたよつすで砲座に腰掛ける。

「ミサイル！メガ粒子砲用意！オート機銃モード起動」

「二キ君！メガ粒子砲はだめだ！ミサイルで牽制しろ！」

「了解！…ミサイル発射！」

キャリーベースからミサイルがばらまかれるように発射され、同時

「『アンドロビウムも白いカー『ゴが開き、一いつのミサイルコンテナを吐き出した。

「やあせむかーマークは接近し、至近距離からバズーカを放つ。しかし装甲はびくともしない」

【ドドンー】

同時に二つのミサイルコンテナが吐き出され、キャリーベースに向かう。

「ミサイルコンテナがいつ……」

言い掛けたマークのザクに白い装甲が迫る。

「うわああっー！」

マークは避け切れずにもうに食らい吹き飛ばされる。

遠くでミサイルコンテナが弾け大量のミサイルが射出される。

「ミサイル接近ー！」

シェルドの声が響き、イエーガーは操舵桿を思い切り引いて艦首を下げる。

「迎撃だー！」

ゼノンの指示を受けた二キは機銃を起動させ、ミサイルを迎撃してゆく。しかし綱のように擦り抜けたミサイルが艦に接近する。

「ダメだ!! サイル直撃します!!」

一キの言葉に全員頭を抱える。

「マリア・オーハンス・トルネードガンダム1号機!!迎撃行動に出ます!!」

無線に割り込むマリアの声、それとともにザクマシンガンを一つ着けたトルネードガンダムがカタパルト上に現れ、直撃コースのミサイルを片つ端から叩き落とした。

「マリア君!! 助かった!!」

ゼノンは立ち上がり、礼を言おうとすれば、マリアは首を横に振る。

「まだです艦長!!」

爆発の煙を突き抜けたデンドロビウムが一気にキャリーベースに迫る。

「ああああ!!」

両手のガトリングガンとザクマシンガン、腹部ビーム砲、頭部バルカン…マリアは全身の火器を撃ちまくった。しかしデンドロビウムは止まらない。下部に着いたアームからサラミスを切り裂いた巨大ビームサーベルが生える。

「イエーイ!!」

ゼノンはイエーガーに怒鳴るが、イエーガーは既に艦を下に向けていた。

「避けきれねえ！！」

イエーガーは声を擦りだし、ブリッジ曰がけてピンク色の光が迫る。

「うわあああ！！」

全ての人間がテンドロビウムから目を反らした。

「あああああっ！…」

しかしテンドロビウムの右側に誰かが叫びながら取りつきバーニアを全開に開いて押し出す事で、ビームサーベルの角度がズレてプリッジの上を素通りする。

「エリス！…」

マリアが叫んだ。テンドロビウムに取りついたのはトルネードガンダムだった。

「脚を守る…誰も傷つけさせるもんかあああああああっ！…！」

エリスの額の辺りで何かが弾け広がって行く。

エリスのトルネードガンダムは急にビームライフルをテンドロビウムのオーキスとよばれる右部分に突き刺して引き金を引いて離脱する。

【ドヨン！】

中の//サイルコントナに引火して爆発し、オーキス上部が弾けてテンドロビウムの全身が下に傾き、エリスのトルネードガンダムは爆風で上に打ち上げられる。

デンドロビウムはすぐさま反転してメガビーム砲の砲心をエリスに向けて突きを放つ。

「……」

エリスは両手にビームサーベルを引き抜き、右向きに機体を反らして一撃を避けてから右のビームサーベルで砲心を切り上げ、デンドロビウムの勢いに逆行するように右のアームを切り捨てる。

「キャリーベース！』

エリスはエリスとは思えない声で叫んだ。

「エフイールドジョンレーターを破壊します！爆発確認後に主砲で攻撃を！」

「え……ええ……」

唚然としていた二キだったが小さく頷き、反転したデンドロビウムに照準を合わせる。

「はあああっ……』

左のアームからビームサーベルを展開するトンドロビウム、エリスは正面から斬り掛かる。

衝突しあつて一つの機体、しかしトンドロビウムの中に入っていたステイメンはビームライフルを引き抜きエリスに向かつて撃ちだした。エリスはビームライフルの攻撃をビームサーベルで切り裂き、激突の瞬間に下に潜り、すれ違ひ様にエフィールドのジオネレータにビームサーベルを突き立て引き裂いた。

【ドオンー】

激しい爆発、それを確認したニキは引き金を握る。

「沈め――化け物――」

ニキは引き金を引くと、キャリーベースの主砲が発射され、オーキスを貫いた。

【ドォンー】

爆発オーキスの中からガンダムタイプ。ステイメンが姿を現す。エリスはステイメンに向かつて突撃する。

「はあああつ――」

しかし…

【ドオンー】

激しい機動に、トルネードガンダムのスラスターは既に限界だつた。オーバーヒートしたスラスターを開いた瞬間に爆発したのだ。

「きやあああー！」

トルネードガンダムはグルグルと無防備に回りだす。ステイメンは無慈悲に右手のビームライフルを構えた。

「いや……」

エリスの脳裏に死の瞬間が過る。しかしその直後。

【ダダダダー！】

横合いからのマシンガンによる銃撃がステイメンのビームライフルが弾き飛ばす。

「エリスにばかり格好つけをしてたまるか！」

同時にボロボロなマークのザクが突っ込んで来た。ステイメンはビームサーベルを引き抜いてマークのザクへ向かう。

「はああー！」

マークはヒートホークを抜き放ち、マシンガンを片手に接近すると、ステイメンは真っ直ぐにビームサーベルを伸ばす。マークのザクは機体を横に避け、マシンガンをステイメンの腕に押し付け…撃つ。

【ドオン!】

至近距離からの一撃にビームサーべルを手放すステイメン、マークはその頭にヒートホークで叩きつける。

【ガイイン！！】

しかし流石はガンダムタイプである、ヒートホークでの一撃では深く入り込まず、その手を掴まれてしまう。

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

マークは吠えてマシンガンで「クピットを貫き、引き金を引いた。

〔二十九〕

ステイメンは身体を躍りせて手を離し、マークはそのステイメンの機体を蹴飛ばした。

「やつたか…」

マークはステイメンの昨日停止を確認し、エリスに身体を向けようとした。

「マークセニー！」

エリスは見ていた機能が停止したはずのステイメンの手が、「コクピット」のマシンガンを引き抜き、マークのザクに向け構える瞬間を…。

「な！？？」

マークは驚きで口を開け、声を漏らす。

【ドクン!!】

弾ける爆発音、しかしそれはステイメンのマシンガンの音では無かつた。

そこにラナロウの通信が入り込み、ヘビーガンダムが飛び込んで来る。

「ナウセカ...」

ラナロウのヘビーガンダムはそのまま接近し、頭に付いていたヒートホークをつかんで振り上げ、頭から切り裂き真つ二つにし、そしてキャノン砲でステイメンをぐちゃぐちゃに粉砕した。

「ラナロウさん……！」

「遅くなつてわりいな！…配線見てたら時間くつてよ…」

ラナロウはベビーガンダムをあの場で修理してやつてきたのだ、エリスはそんなラナロウのベビーガンダムを見て、安心しそして…。

「良かつた」

張り詰めた緊張が解れ、一気に疲れが押し寄せたエリスはそのまま気を失った。

「あおい！エリス？エリスー！ー？」

同時に宇宙に亀裂が走り、白い光に包まれた……。

「ん……んんっ……」

エリスが目を覚ますと、何時もの白い天井だつた。

『日本書』

エリスは身を起こす。しかしキャリー・ベースの医務室ではない。

- 1 -

バー・テーシンをする。隣のベッドマークが寝転がっており、マリアがその横にいる。

「お！ 起きたがエリス！」

振り返れば「ナウ」か果物の籠を持ってバー・テ・シンを全開に弓く。

「え……お……」

「……はジェネレーションフォースの月基地だ」

隣にいたマークが言えばマリアも頷く。

「え……」

「あなたが尖兵を倒した後に、白い光に包まれて……気が付いたら月基地の近くにある宙域を漂っていたらしいわ」

マリアの言葉にマークも頷く。

「当然だ……月光蝶の尖兵を倒したんだから。あの時代にはもう虫はないからな……」

「マークさん、月光蝶の尖兵って……なんなのですか？」

エリスの言葉にマークは少し渋い顔をした。

「黒歴史にしている元だ……特定の条件を満たしたウォーズブレイクによつ現れる……」

「倒せば、黒歴史は歴史となり……記憶となる」

ラナロウが据え置きのトレーディングをつけると、一年戦争の特集がやつていた。

「ベジーガンダムも持つてこれた、いまフルアーマーガンダムにする為に改良中だ」

「えー……でもフルアーマーガンダムは……」

「黒歴史つてのはオレらにや関係ねえから心配すんなよ」

「ラナロウはベッドに腰を下ろした。

「ちなみにフルアーマー・ガンダムはオレのもんだからな！」

何処か血糊氣にいつラナロウだったがマークは身体を起こす。

「フルアーマー・ガンダムはオレが貰う…」

マークの言葉にラナロウは一気に不満を訴える。

「はあ？ 隊長ずりいよ！！」

「お前にはトルネードガンダム1号機があるだろ？ それに装甲と火力以外はトルネードガンダムの方が上だぞ？」

「ぐぬつ…」

それを言われて黙り込むラナロウだが、マークはエリスを見た。

「しかしそ前がまさかＳＥＥＤを持つ人間だったとはな…」

マークの言葉にエリスは首を傾げた。

「ＳＥＥＤ？」

「コズミックイラという黒歴史にある特異な体质だ… 頭の中で種が弾けるような感覚の後… 戦闘力が飛躍的に向上するらしい… しかし、良くはわかつていなー」

エリスは今までの戦いの中で頭の中で何かが弾けた時の記憶が薄く、

良く覚えてはいなかつた。

「ふん…エリスみたいに扱えればトルネードガンダムでもガンダム試作3号機を倒すことだって出来るんだ。ラナロウ…トルネードガンダムは凄いだろ？」

わたしは凄いんぢやないんですか…とエリスは心中で囁くも黙っていた。ラナロウはとこうと…

「エリスなんかに負けるかよ…見てもエリス…お前なんて直ぐに抜かしてやるからな…！」

ラナロウは捨て台詞を吐き、出でいった。

「わたしも…行こうかしら」

マリアは立ち上がるとスカートのしわを叩いて伸ばした。

「ん? 何処へ?」

マークが聞けば、マリアは口に指を当てる。

「内緒…」

そして部屋は一人きりになつた。

「マークさん…」

「ん?」

エリスは少し控えめに、シーツを摘んで握る。

「もう少し……ジエネレーションフォースについても……いいですか？」

自分の意志を固めた瞳はマークを見つめた。

「何言ひてんだ……トルネードガンダムに乗つた時点でお前はオレの一人員だ……今更抜けたいなんて言われても無理な話だな」

マークは照れたよつにテレビに向かって。そこには一年戦争の戦いがいつまでも映されていた。

一年戦争の介入から1週間、エリス達は新たに戦いの場へと赴くのであった。

最初の介入に成功したエリス達ジェネレーションフォースは、次なる介入にむけて準備を行っていた。

「なんですか？これ

エリスはモビルスーツドックにいた。ドックにはトルネードガンダムが2体、それと隊長であるマーク・ギルダーの乗るフルアーマーガンダム。そして白い布に包まれた機体が運び込まれていた。

「さあな…」

隣であきれ顔をしていたラナロウは、ジユースを片手に背を向ける。そんな時

「エリスさん！ラナロウ君…！」

下から懐かしい声が響いた、エリスが顔を下に覗かせると、長い茶色髪に帽子を被り、白と黒を基調とした軍服を着た女が手を振つていた。

「マリアさん！？じゃああれ…」

エリスは思わず身を乗り出し叫び返した。

「ええ…そうよ！久しぶりですね」

最初の介入から三週間が過ぎていた。マリアは介入の報告をしに一

路軍に戻っていた。

エリスはデッキからマリアのいるドックに降りて向かう。そこではマリアとケイが話しかんでいた。

「またあんたが帰つてくるなんてね…」

「はい、マークを一人には出来ませんから…」

そして二人は上を見上げるそこには、白い布に包まれた機体がある。

「マコアさん」

エリスはマリアの背中に声を掛ける。エリスに気付いたマリアは振り返った。

「エリスさん、また宜しくね？」

「はい！此方こそ

二人は再会の握手を交わし、そして共に白い布を見上げる。

「軍から持つて来たの、今度は邪魔にはならないわ

マリアは端末を操り布を剥がした。そこには三角形のような頭をした白い機体があった。

「【ON-12SMSトーラス】といつ機体よ、A-C195年といつ黒歴史に実際にあつた機体よ」

「へえ、トルネードガンダムより一回り小さいですね……」

エリスの意見にマリアも頷く。

「ええ、でも性能はお墨付きよ~。軍から一機持ち出すだけでも大変だったんだから」

ケイは見上げながら頬をかく。

「おまけに万能使用に改良されたタイプじゃねえか……高スペックな物を持ってきたな……」

「軍はそれだけ、介入に力を入れはじめたという事ですよ
マリアは自信を伺わせた表情をした。

「そう言えばエリスさん、マークは?」

「マークさんはブリッジですよ」

「やつ、ありがとう

マリアはさすとブリッジへ向かって行つた。

「あいつも熱いよな、お前もブリッジにいきな……そろそろ一回目の介入だろ?」

「はい」

ケイは欠伸をして端末からデータを見始め。エリスも追い出される
ようにブリッジへと向かった。

ブリッジでは、早速マリアとマークによる夫婦喧嘩が勃発していた。
「バカか！あんなオーバースペックな機体を持つてくるなんて何考
えてんだ！」

「いいじゃないですか！軍だってわたしに死んで欲しくないんです
から！ジェネレーションフォースの軟弱な武装だけでは軍は心配な
んですよ！！」

「だからといってトーラスを導入するのか！？」

「トーラスならガンダムに匹敵する力を持つています！しかし強過
ぎる力ではありません！」

「……」

「……」

二人は終始睨み合いつ。

「夫婦喧嘩は終わりかしら？」

そこで今まで黙っていたニキが間に入り込む。

「夫婦じゃない」

「夫婦じゃありません」

マリアとマークは同じようにいきぴつたりに叫んだ。

「一キさん、次は何処へ介入するんですか？」

エリスが空氣を変えようと手を上げる。

「ブリー・フィングで言つたじやない、次は宇宙世紀〇〇八七よ？前回介入した一年戦争から七年後よ」

ブリー・フィングで聞いていたエリスは再確認し、頷いた。宇宙世紀〇〇八七…ジオン公国軍に勝利した地球連邦軍は増長し、コロニーに対し支配と圧力を強めていた。やがて連邦軍内部に「ジオンの残党狩り」を名目に、スペース・ノイドへの強制的制裁を加えるエリート部隊「ティターンズ」が創設された。急速に勢力を拡大したティターンズに反発する一部の連邦軍人やスペース・ノイド達は反地球連邦組織「エウーゴ」を結成する。

エリスは回想を終えてゼノンに目を向ける。ゼノンは立ち上がり全員を見回した。

「これよりー介入を開始する、キャリーベース発進ー！」

「了解！」

叫びと共に、キャリーベースが動き出し、介入行動が始まろうとしていた。

EP・7【木星帰りの男】（前書き）

宇宙世紀0087・4月末へとやつてきたエリス達、これは総勢な
戦いの序章に過ぎない。

一回目の介入を開始したエリス達を乗せたキャリーベースは、【宇宙世紀0087】の地球軌道にいた。

「しつかし、流石はミラージュコロイドだな～」

ブリッジの前をティターンズのサラミス級が、平然と横切るが、バレる気配はない。

イエーガーは関心しながら頭の後ろで手を組んだ。只でさえ目立つカラーーリングであるキャリーベースが地球軌道に漂つていられるその理由は、ミラージュコロイドとよばれるコズミックイラという黒歴史内に存在する技術が使われているからであった。ミラージュコロイド起動中は、レーダーに探知されず視認も難しいとされ、強襲や電撃作戦に用いられる。それを搭載したキャリーベースは、まさに幽霊船である。

「こんなに地球は美しいのに…」

エリスは娯楽室で無重力な空間に漂つたまま、モニターにうつされた地球の映像を眺めていた。この宇宙世紀にやつてきて3日、予測された頭痛もなければ、ミラージュコロイドのお陰で戦闘すらない…そんな状況ではあるが、地球軌道では今日もビームが飛び交っている。エウーネとティターンズの艦隊による戦闘が行われているのだ。

当初は介入しようとしたエリスだったが、隊長であるマークにより

却下された。

「退屈だな……シ//コ レーションでもやついくか？」

「ナロウのシ//コ ラーニングへの誘いは口課になつたある。

「はい……行きまわ」

エリスは欠伸を噛み殺し、ラナロウの背中を追い掛けた。

「エリス、ラナロウ……何処へ行くんだ？」

その背中をマークの声に呼び止められ一人は振り返った。

「え……」

一人は顔を見合せると、マークは鷹のような鋭い瞳で一人を睨む。

「これからミーティングだ、パイロットスースに着替えたらドックに集合しろ」

それはこれから始まる戦いの幕開けに為る事を、この時の誰も予期してはいなかつた。

ドックへ集められたエリス達はマークの前に集合する。

「やつと実戦つか？」

デスクにだらしなく座るラナロウが言えば、マークは頷いた。

「ああ、そうだ…そろそろこの地球軌道にアーガマがやってきて大規模な降下作戦が行われるのは知ってるな?」

エリスもラナロウも頷きラナロウは姿勢を正した。

「我々の任務は、部隊の降下を終えたアーガマの撤退支援と追撃のティターンズ艦隊の殲滅です」

マリアはホワイトボードにモニターを映し、ティターンズのMSのデータを掲示してゆく。

「よつて各員は第一種戦闘配備…このミーティングが終わり次第口クピットにて待機だ、いいな」

「「了解」」

エリスとラナロウは同時に敬礼すれば、自分の機体に向かった。

「トラスの実戦配備か…」

マークはマリアの横で呟いた。

「目立ち過ぎるなよ?量産されたら厄介だからな…」

マークはそう苦笑すれば、マリアは笑い返す。

「大丈夫ですよ、わたしの敵じゃありません」

マリアは言いながら両手に何かを挟んでいる。

「お前それつ……」

マリアの手にしていた物は、【ハロ】とよばれる自動演算と機体のバランスを整える機能を兼ね備えた自力型AIである。

「これがあれば反応値倍ですよ」

マリアは言しながらハロの電源を入れた。

「宜しくね、ハロ?」

『よろしくな、よろしくな』

電源を入れられたハロは、何度もバウンスしてからマリアの胸の間に体を埋め、マリアはこりやかに皿のトーラスに向かう。

「まつたく…現金なやつだ…」

ため息を吐き出したマークも、自分のガンダムに向かった。そして…

【各員に通達、各員に通達…地球軌道上にてヒューゴとティターンズの大規模な戦闘を確認、降下作戦開始されました…繰り返す、降下作戦開始されましたMS隊発進して下さい】

赤いブザーランプと共に発進へと切り替わる。

「追いでなすつた! 行くぞ!」

「 「 「 「了解!-.」 」 」

エリス達はカタパルトへ向かう。ブリッジではゼノンが無線マイクを片手に何かを待っていた。

「キャリー・ベースよりアーガマ、キャリー・ベースよりアーガマ聞こえるか」

ゼノンはゆっくりとした口調で叫げれば、暫くしてモニターが開かれる。

「アーガマ艦長ブライト・ノアです、キャリー・ベース」

「わたしはキャリー・ベース艦長、ゼノン・ティーゲルだ…これよりエウゴ艦隊の撤退援護を開始する」

「な、なんだつて!-?」

一瞬取り乱した、モニター越しのブライトは、直ぐに冷静に推理し、顎に手を当てる。

「何処の部隊かは知りませんが、現在の我々にティターンズを退ける戦力はない。支援感謝します…」

ブライトは姿勢を正し敬礼してくれば、ゼノンも敬礼を返して無線を切り立ち上がる。

「MS隊発進!-!」

ゼノンの言葉にカタパルトが開放される。

「準備はいい？マーク」

マリアのトーラスはカタパルト内で可変し、可変したトーラスにマークのフルアーマーガンダム梶まる。

「オレはいつでもいい。宙域までの運搬は頼んだぞ」

マークはコクピットで腕を組み、目を閉じた。

『トーラス発進！トーラス発進！』

ハロが発進アナウンスし、マリアは操縦桿を握る。

「マリア・オーホンス、マーク・ギルダー！発進します！」

二人はカタパルトから打ち出され、真っすぐに戦闘域へ向かう。

『エリス！2号機は機動値をいじつといったから、確認しておいてくれ』

ケイからの無線を受けてエリスは頷く。

「了解です！エリス・クロード、トルネードガンダム2号機！発進します！…」

エリスのトルネードガンダムはカタパルトから打ち出されてトーラ

スを追い掛け。その後ろをラナロウの一号機がついてくる。

先行したマークとマリアは、アーガマとすれ違い、背後のサラフミス改へと向かう。

「あれは…？」

アーガマのブライトは、ブリッジからその二機を見ていた。

「片方は、戦闘機のよつです、乗つてるのは… ガンダム！？ 実験初号機です！」

「ガンダム…だと？」

オペレーターであるトーレスの声に、ブライトは表情を曇らせた。

「さりに…2機…来ます…！」

遅れて発進したエリスとラナロウもアーガマとすれ違う。

「またガンダムタイプ！？ なんなのでしょう、彼らは…」

トーレスはガンダムタイプを撮影し、ブライトに顔を向けた。それを受けたブライトは渋い表情になる。

「さあな… ただ敵で無いことを祈る

ブライトはそういうながらエリス達を見送り、遅れてキャリーベースとすれ違う。

「すっごー！あれがアーガマか！」

キャリー・ベースオペレーターのショルドはにこやかにアーガマを撮影する。

「後の英雄ブライト・ノア…か」

ゼノンは何処かつまらなそうにアーガマを眺めていた。

舞台は再び戦場へ

「サラミス改2隻!、ハイザック12、ガルバルディ 8!..」

マリアは前の端末に差し込まれたハロから受けた情報をマークに叫ぶ。

「楽勝だな…船はオレがやる、雑魚は任せたぞ

「了解！先行して仕掛ける！」

フルアーマーガンダムはトーラスから手を離してゆっくり離れていくと、トーラスは加速し、先行する。

「敵の所属不明の戦闘機！此方に向かって来ます！」
サラミス改のブリッジでオペレーターが叫ぶ。

「戦闘機等敵ではない！！ミサイル発射だ！！」

戦艦より放たれた大量のミサイルがトーラスへと迫る。

「そんなもの……」

『**『樂勝！樂勝！』**

トーラスはハロの演算能力と、持ち前の運動性を生かして飛び回り、ミサイルとミサイルの間を巧みに避けながらミサイルの中を切り抜けミサイルの中を突破する。

「はーー早い！？真っ直ぐ此方へ向かつて来ますーー！」

「ぬええいーー戦闘機風情に何をしているかーーMS隊に迎撃せらーー！」

サラミス改の指揮官の命令よりも早くマリアのトーラスはビームライフルを発射した。

【**ズギュンー！**】

放たれたビームはまっすぐ呆然としていたハイザックのコクピットを貫いた。

「うーーうわあああつーー！」

瞬く間に光の玉となるハイザック、そんな光景をみたティターンズ

の兵士達は状況を理解し切り替える。

「困め！ 戦闘機だからと油断するな！」

兵士長は兵士達に指示を飛ばしてマリアを囮もうと散らばり始め、マリアはレバーを思い切り引いた。

【ギイイン！】

トーラスは鳴き声のような機動音と共に上昇しながらゆづくり可変し人型となり、黄色いアイカメラが不気味に輝く。

「かーー可変したあーー!?」

驚くティターンズの兵士達。

「敵はたつた一機だ！数で攻めろ！！一気に叩くのだ！！」

MS部隊の隊長は見事な指揮をさす……が、そんな間すら命取りとな
る。

『多重ロック！多重ロック！』

ハロの声に合わせ、マリアは次々に引き金を引いた。トーラスはリズミカルな腕の動きに合わせてビームライフルを発射する。発射されたビームは次々にティターンズの機体を粉碎し、3つの光の玉に変えていった。

「いつ！一瞬で3機！！？」

隊長は驚きの声を挙げ、飛んできて黄色い輝きに包まれ光の玉になつた。

「た！…隊長ー！…つー強すぎるー…つわあああっー…」

そんな通信の間にもまたあらたに1機のハイザックが光になる。マリアのトーラスに見事に攪乱された部隊は、索敵能力を失う。

「マリアばかりに攪乱されているなんてな…情けない部隊だー！」

そこに、突然サラミス改のブリッジに躍り出たマークのフルアーマーガンダムは、ブリッジを右腕の2連ビームキャノンを発射した。

「がー！ガンドーム！？ガンドームだあー！」

サラミス改のブリッジは見事に吹き飛び、その隣を航行していたサラミス改の指揮官は驚き目を見開く。

「な、なんだあー！？」

しかし遅かった。振り返ったマークのフルアーマーガンダムの右肩のキャノンが発射され、サラミス改の艦長は、ガンドムの存在に気付く前にブリッジを粉碎され、命を散らした。

「ま、容赦しねえよな…」

マークは右腕のビームキャノンで航行不能になつたサラミス改を次々破壊して光の玉に変える。そうしてる間にマークを10機の機体が囲む。

「よく周りを見ろよ…」

マークはそう言つと、ビームの火線が2つ飛んでくる。一つは背後のガルバルディの「クピットを貫き、一つは真横のハイザックの頭を破壊した。

「行くぜーーー！」

ラナロウとエリスだつた。ラナロウとエリスはすかさず飛び込み、背中あわせにビームライフルを撃ちまくり、敵を分散させる。

【ドードドード】

分散した敵は上から降り注ぐビームの嵐を受けて次々に撃墜されていく。

上では白いトーラスがビームバズーカとビームライフルを両手に構えひたすら撃ちまくつて次々とティーンズの兵力を奪っていく。

「マリアさん凄い…」

エリスは言いながら迫つてくるハイザックの攻撃を後ろに身を引いて避け、ビームサーべルを引き抜き下降して脇をすり抜けながらその両足を切り裂いて後ろに周り、背中を蹴飛ばして、ビームライフルを構え両腕を撃ち抜き破壊した。

「エリス！残すなよ！」

ラナロウは動けないハイザックを撃ち抜き光の玉に変える。

「ラナロウさん…わたしは殺したいわけじゃ…」

「やひなきややられむれ」

ラナロウは容赦なく敵のコクピットを撃ち抜いて爆発させていく。

「それでも…わたしは…」

そうしてこの間に、20ものMSは全滅していた。

「骨が無いわね…」

マコアのマークスがゆっくりと降下していくて横に並ぶ。

「ティターンズなんてそんなものだろ?」

マークはついで周囲を見回した。

「周囲に機影なし…これよつ」

しかし…

「上ですー。」

エリスは素早く反応して上に向かいビームライフルを発射した。

「なー?」

ラナロウも慌てて田線を送る。そこにはデブリがありビームはデブリを撃ち抜くと、そのデブリの背後から紫色の機体が顔を出した。

「あれは……」

マークは声を吐き出す。その前にエリスは動いていた。

「はああああ……」

エリスは紫色の機体に突撃してビームサーベルを引き抜く。紫色の機体は頭の上にのるようなバックパックから大量のミサイルを吐き出す。

「やめろエリス！……そいつと！……そいつとは戦うな……」

しかしエリスは止められなかつた。単純に気持ち悪い感覚だつたのだ。ミサイルの中を搔い潜り、紫色の機体にビームサーベルを振り下ろす。しかし紫色の機体は後ろに身を引いて子供あやすかのように避けた。

「はあああ……」

エリスは腹部の拡散ビーム砲を発射するも、紫色の機体は体を抱えるようにする動作のみでビーム砲を受けけるが装甲にダメージすら与えていない。

「離れなさい！エリス！……」

そこにマリアのトラースが突っ込んでビームライフルを乱射す

る。紫色の機体は可変し、ビームライフルを華麗な動きで避けていく。マリアのトーラスも可変し、その後を追撃する。

「マコアさん……」

エリスは紫色の機体のコースを予測して先回りしようとするが、紫色の機体は途中で可変して人型に戻る。

「……」

ビームサーベルを引き抜き、マリアのトーラスに振るう。突っ込んでいたマリアは機体を減速せながら可変し、ビームサーベルを引き抜いてビームサーベル同士で打ち合つ。

「くーーー！」

マリアのトーラスはバーニアを巧みに操りながら紫色の機体のビームサーベルを振り払い、ビームライフルを構える。しかし紫色の機体は先読みしており、トーラスよりも一回りも巨大な機体で体当たりを食らわせてきた。

「うわああーーー！」

小さなトーラスは吹き飛ばされてしまい。切りもみ回転すればコクピットのマリアは頭をぶつけて意識を失ってゆく。紫色の機体は慈悲に頭の上にあるビーム砲を向ける。

「あああああーーー！」

エリスの額で何かが弾け、叫びながらバーニアを全開に開いたトル

ネードガンダムは、一気に突撃してゆく。

「な……」

紫色の機体に乗っていたパイロットは驚きを顕にし、そのまま激突する事で、射線をずらす。

「しゃらぐさい奴め！！」

エリスの頭にやぢらした男の声が響く。紫色の機体はビームサーベルを引き抜きエリスに振るう。しかしエリスはその手を掴み格納されていたガトリングガンを至近距離から撃ちまくり紫色の機体の腕をちぎりとり、奪つたビームサーベルを横廻ぎに振るう。

「あああ！！」

ビームサーベルは紫色の機体の両足を切断し、紫色の機体は苦し紛れにトルネードガンダムに体当たりを食らわせてくる。

「うわあ！！」

エリスは体当たりをもろに受けその衝撃で息を吐き出して急激な酸欠となり、そのまま気を失つてしまつ。

「恐ろしいパイロットだ……この程度の機体で私のメッサーに此れ程のダメージを『えよつとは……』

紫色の機体、メッサーに乘っていた男は、手を伸ばしてトルネードガンダムを掴む。

「エリス！！」

そこへラナロウとマークがようやく駆けつけ、ナビームで牽制する。マリアのトーラスも回り続けているため、マリアも気絶している事も伺える。

「水入りか……」

男はエリスのトルネードガンダムの「クピットハッチ」を丁寧に開け、腕をコクピットに押し込んでエリスを引き抜くと可変し、頭の2連ビーム砲でトルネードガンダムを破壊し、飛び去った。

「エリス！！エリスー！！！」

ラナロウは追い掛けようとするがマークのガンダムに掴まれ止められる。

「待て… ラナロウ、先ずはマリアの回収が先だ…」

「アサヒ...」

「ランロウー！」

マークに怒鳴られたラナロウは縮こまり、そしてせんた。

「まさか、あれのパイロットが女だとは思わなかつた…」

一
方

男はメッシュサーラの手に乗る小さな少女をモニターから見下ろしながら先程の戦闘を思い返す。

「この娘ならば…この先の世界を…出来るやもしれん…期待出来そうな逸材だ…ふふふ…ふはは…ハハハハハハハッ…！」

野望に燃える男の高笑いが何時まで響き続ける。男の名は【パパ
テマス・シロッコ】木星帰りの男である。

EP・8【パプテマス・シロッコ】（前書き）

ティターンズの旗艦【ドーゴスギア】へと連れてこられたエリスは、木星帰りの男と呼ばれる。パプテマス・シロッコと出会い。

「おーりーーー起きのひーーー」

突然、水が顔に掛けられたエリスは否応なしに脳が覚醒し、目を覚ます。

「はー」

田を覚ましたエリスは黒い軍服の男達に囲まれていた。

「やつと田を覚ましやがったか…」

男達は下品に笑いだす。

「なーなんですかあなたたちはつー！」

エリスは立ち上がろうとするが両手が動かない。見れば、両手には手枷を付けられていた。

「なんだ？じやねえだろガキがーーー！」

前で笑っていた男の蹴りが、エリスの腹を打ち付け衝撃が突き抜ける。

「がはつーーーあーーー！」

エリスは立ち上がりうとした姿勢から身体を丸め、声が出ない程に息を吐き出して蹲る。

「ガキが生意気な口を聞くからだーおら立てー！テメエからは聞きたい事が山程あんだよー！」

男はエリスの髪の毛を掴み、引き摺るように立たせる。エリスは痛みのあまり男の手を掴み悶える。

「きたねえ手で触るんじゃねえよー！！！」

男はエリスを振り払うように投げ飛ばして床に叩きつけた。

「つあつー。」

エリスは「口」口転がって痛みに表情を歪める。すると一人がやって来てエリスを抱き起こす。

「おいおい、ガキだといつても女だぜ？ならさ…もつと楽しい事しよつぜ？」

男の言葉にその場の男達の目付きが変わる。

「それもそうだな…」

男はナイフを取り出し、エリスへと歩み寄る。

「なー…なにし…やめてくださいー。」

身体を捩らせ逃げようとするが背後から男に抱え込まれて身動きが取れない。そうしている間にナイフをバイロットスーツに押し付けられる。

「動くなよ、綺麗な肌が傷物になつちまつぜ？へへへー。」

そしてパイロットスーツを縦に切り裂いた。

「いやああああ！！」

その瞬間に自分が何をされようとしているのが分かつたエリスは、悲鳴を挙げて足をばたつかせるが、男の手がゆっくりと延びてくる、そしてエリスのパイロットスーツを脱がそうと触れ。

【ドオン！】

突如として銃声が響き、男達は一斉にそちらへ顔を向けた。そこには一人の男が立っていた。袖の切り取られた黒い軍服に髪を不思議な形に結んだ長身の男である。

「貴様ら、わたしの客人に何をしている？」

男は声を震わせ、鋭い瞳を光らせ怒りを露にしていた。

「なんだあ！？ テメエ！ 誰に向かって」

【ドオン！】

辺りの男たちはその男を見るなり黙り込んでいたのだが、エリスの前にいた男はその男を見ることなく言いながら振り向いた。すると男は容赦なく、向かつて来ようと振り返った男の右足を撃ち抜いた。

「あやあああー！」

「口の聞き方には気をつけたまえ、次は足ではすまさんぞ？」

男の脅しに男たちはじよめきをして身を退いた。

「だ…誰だてめえー！」

「おいーー！」

足を撃たれた男は彼が誰か、知らなかつた。同時に隣にいた男に止められる。すると拳銃を向けていた男はゆっくりと拳銃を降ろしてホルダーにしまつ。

「わたしは…パプテマス・シロッコだ」

その瞬間、撃たれた男は撃たれたにもかかわらず表情が変わる。青くなつた。

「た！大佐殿の客人とは知らず…失礼しました！」

足を打ち抜かれた男の隣に一人が敬礼し、そして逃げるよう部屋から出ていく。

「俗物共が…」

男たちがいなくなるのを確認したシロッコは小さく愚痴を漏らして

からエリスに歩み寄る。

「怪我はないかね？」

脅えるエリス優しく語り掛け微笑みかける。

「あ…ありがとうございます…」

シロッコはゆっくりと膝を降り袖の無い軍服を脱いで被せようとす
る、しかしそのまま手枷に向かつ。

「…」れだから俗人はいけない…手を出しなさい

エリスは言われるままにシロッコに手を出すと、シロッコは床に落
ちたナイフを広い、手枷の鍵穴に差し込むと簡単そうな手際で外し
た。

「あ…あの？」

「立てるかな？」

「え…はい」

手枷を外したシロッコは、動搖するエリスに袖の無い上着を着せる。

シロッコは何も言わず、ただ優しく手を差し出した。エリスは、シ
ロッコに手を借りて立ちあがる。

「先ずは君の名前だ……」

眼光煌めくシロッコの瞳に見つめられたエリスは、少し怯えてしまふ。そんなエリスにシロッコは優しく微笑みかける。

「わづ、替える必要はない」

そんなシロッコの表情を見ていたエリスは、ゆっくりと口を開いた。

「…エリス・クロードです…」

「エリス君か…いい名だ、ついて来たまえ、先ずは着替えなければな？」

そう言つてシロッコは背を歩きだし、今まで名を讃められたことのなかつたエリスにとって、それは新鮮でありシロッコから感じていたとてもない負の感情も既に気にしなくなつっていた。エリスはシロッコの背中を追い掛けた。行き着く先は軍服の集積所である。

「これは…」

エリスは服を見つめて顔をしかめ、そして言葉を失う。

「ティターンズの制服だ、着たくない気持ちもわかる。しかし、年頃の娘が…いつまでもそんなパイロットスーツで生活するわけにもいかんだろう?」

シロッコの言葉は正にその通りだった。言い返せないエリスは確りと頭を下げ自分のサイズにちかそうな服を手に取り試着室に向かう。ティターンズの制服は思った以上にラフな作りになっていた着替えを終えたエリスは鏡に映る自分を見つめた、死ぬほど似合わない事がわかる。試着室から出たエリスを、シロッコは壁に寄りかかるようにして待っていた。

「…ふむ、君に軍服は似合わないな…」

シロッコは真っすぐにエリスを見つめてそう告げると崩していた姿勢を正した。

「ついて来たまえ、飲み物でも飲みながら話をしようではないか…」

シロッコはそつまた一人でしゃべると歩きだす。エリスは小走りにその隣に並んだ。

「あの…」

エリスの呼び掛けにシロッコは手を向ける。

「礼には及ばない、礼を言いたいのは寧ろわたしの方だ」

そんなシロッコの言葉に、エリスはぞりつづく感じを覚え、戸惑いに目を見開く。

「え…わたしあなに…」

「あの時、メッシュサーラのビームサーベルを奪つた君は、あのまま「クピット」とわたしを切り裂けた筈だ…しかし君はそれをしなかつた…」

エリスの表情は一気に強ばり氷付いた。

「あなたは…あの時のつー?」

「やう、キミが壊したあのマシーン…メッシュサーラのバイロッティヤ」
シロツコは鼻で笑う様な仕草をしながら足を止める。そこには扉があつた。

「な…何故敵だつたわたしを…」

「敵意のある敵は、あのような情けをかけない…だから君は敵では無いと判断した…」

エリスの言葉を聞きながらシロツコは氣にせず扉横の端末に暗証番号を打ち込み扉を開く。

「入りました…わたしの私室だ、汚い所だが我慢してくれ」

エリスは言われるがままにシロツコの私室へとに入る。シロツコの私室は男性というイメージがない程に整頓されていた、目の前には向かい合つて並ぶ長ソファーやテーブルがある。

「不満そうだな…まあいい、掛けてくれ」

シロッコは苦笑しながらも部屋に入り自動ドアがしまる、それを確認したエリスはゆっくりとソファーに腰掛けた。

「パーへーでも良いかな？」

シロッコは部屋に備えられた冷蔵庫に向かい中から水を取り出し、机脇の「パーへーメーカー」に向かう。

「あ……て、手伝います」

「客人を遇すのは当然だ、座つていたまえ」

シロッコはソファーから立ちあがるが、エリスを諭してソファーに座らせ、背中を向けた。

「わたしのお気に入りだ……口に合つかはわからんが……」

シロッコは余程怠慢なのか、すこし誇らしげに言う。暫くしていると豆の煎るいい香りが立ち込め、シロッコは二つのカップを持ってやってきた。

「まずは君の所属を聞こつ

シロッコからカップを手渡され、エリスは軽く会釈してテーブルに置く。

「…言いたくなればそれでいい、砂糖とミルクはいるかね？」

シロッコはエリスと向かい合つようにソファーに腰掛け、コーヒーをテーブルに置くと、テーブルに配置された角砂糖のビンとミルクの入ったパックに目線を送る、しかしエリスは首を横に振つた。そして、エリスはゆっくりと口を開いた。

「わたしは…【ジエネレーション・フォース】といつ部隊の所属です」

それを聞いたシロッコは眉をひそめ、渋い表情で顎に手を当てた。

「ジエネレーション・フォース…聞いたことの無い部隊だな、それはエウーゴかな?」

シロッコの質問にエリスは首を横に振つた。

「ふむ?、我々を攻撃したのだからエウーゴだと考えていたが…あれは偶然と言う事か…ではティターンズでもない」

エリスは小さく頷く。それを確認しながらシロッコは考へに耽り無意識に角砂糖を何個もカップに入れかき回す。

「では君は…ジオンの残党かな?…」

「…ジオンって国では?」

エリスは意味がわからず首を傾げると、シロッコは確信を得たらしく頷いた。

「やうか…ならば君達は、何処の部隊にも屬していないといつ事になる…新勢力ということになるな」

シロッコは顎に手を当て何かを模索するような仕草をし、エリスはただただシロッコの洞察力の高さに驚いていた。

「では、質問を変えよう…君たちは何の為に介入しているのかな?」

確信の一刺しといえる言葉に、エリスは心臓の高鳴りがきこえてくる程に緊張していた。

「……馬鹿げた話になりますが…信じてくれますか?」

エリスは嘘を付けないと断念し、自分の知りえるジエネレーションフォースの事をシロッコに話した。

「驚いたな…」

シロッコは先程までの余裕な態度を一辺してエリスを神でも見るかのような瞳で見つめていた。

「つまり君たちは、今いる我々の歴史とは別の世界からやってきて、我々の歴史を知っているという事なのか?例えば…わたしの運命すらも…」

エリスは小さく頷いた。

「わたしは知りませんが、ジェネレーションフォースの中にはいると思われます」

エリスの言葉にシロッコはとても深い関心を示し、瞳を煌めかせる。「やうか…そして我々の歴史を後世に残すために、歴史を消滅させた月光蝶なるものより現れる尖兵を狩るのが君達の役目という事になる…そして、尖兵が現れる条件は我々の戦いに介入し、歴史を追体験することだということか…」

シロッコはいつの間にかペンを持ち出し、夢中で数式や計算式を手一ブルに書きなぐり始めた。

「信じて…頂けるんですか？」

余りの高感触に、エリスは思わず口走る。その言葉にシロッコは大きく頷いた。

「勿論だ…初めは夢話だとも思つたが、思い返せば君たちのMSはどれも我々のデータにないマシーンだった…あの白い奴なんてまさにそうだ、あれだけ小型でありがながらティターンズな主力MSを圧倒する火力と運動性能…君の言葉と照らし合わせると總てが事実だと告げている」

そして、シロッコはペンを置いて計算をおわらせた。

「わたしは、時代の行く末を統べるのは女だと思っている…わたしのニユータイプとしての感がつげている、それは君ではないかと…そしてシロッコはエリスの手を取る。

「あ…あのっ」

「君には特別な力を感じるな… それが何かは分からないが、わたしは君に惚れてしまったようだ… わたしは君の力となる事を約束しよう…」

シロッコは真っ直ぐな瞳でエリスを見つめていた。エリスとしては男性の告白というのは初めてであつたのだが…

「パプテマス様」

そこに、ショートカットの少女が入ってきて手をつなぎ見つめ合つエリスとシロッコを見た。

「ぱー・パプテマス様?」

少女は驚きに表情を強張らせるがシロッコは気にせず顔を向けた。

「サラか…どうした」

サラと呼ばれた少女は直ぐに姿勢を正す。

「ジャミトフ閣下がお呼びです」

「また老人の相手か…まあよい」

シロッコは実に不快な顔をしてからエリスに顔を向けた。

「ティターンズの総裁だ、君も来るといい、正し、君はわたしの側近として来るという事を忘れないでくれたまえよ?」

「ティターンズの総裁だ、君も来るといい、正し、君はわたしの側

それは遠回しに、素性を隠せといつ事であることである。直ぐにエリスは理解し、頷いた。

「パプテマス様、その子は？」

サラはシロッコの横に付いてこちらを睨みながら言つてきた。

「彼女は、人類の行く末を担う女性だ…手荒な真似はするなよ」

サラは即座にエリスを睨み付け歯を食い縛る。

「了解…」

「エリス君、ついてきたまえ」

出でいくシロッコの背中にエリスはサラからの憎悪の視線から逃れるようにくつついて行つた。その背中には何時までもサラからの殺氣の籠もつた眼差しが刺さり続けている。

【エウーゴと接触！エウーゴと接触！第一戦闘配備！繰り返す！第一戦闘配備！…】

突然なり響く警報に、シロッコもエリスも上を睨んだ。

「エウーゴか…」

シロッコは腕を組んだ。

「メッサーラの修理状況は？」

サラに聞けば、サラは敬礼する。

「ハッ、メッサーラの修理は現在、替えのパーツを取り付けている最中です……両足と右腕が無い状態では……」

「15%以下…か、この艦にいる兵力で足りそうかね？」

するとサラは首を傾げた。

「この艦には現在パイロットがいません、どこの部隊に撃墜されましたからね…」

サラはエリスを睨み付けながら言つて来た。

「やむを得んな…いまこの艦に使える機体は？」

「……ジムが一機程…ですがお止めくださいパブリマス様…！」

行こうとするシロッコをサラが前を遮り止める。

「どけ、サラ！現状を開けるにはこれしかない」

「シロッコさん…」エリスは行こうとするシロッコの前に立つた。

「私達の責任で戦力がないのなら…わたしが戦力になります！」

それを聞いたシロッコは少し表情をしかめた。

「君は自分が何を言つてゐるか分かつてゐるのかね？君は……」

「わたしは殺し合ひはしません！それでもつゝ助けて頂いた恩を返したいんですつ……」

エリスは熱意の籠もつた叫びをシロッコに浴びせながら歩み寄れば、割り込んだサラに平手打ちを食らわされる。

「黙りなさい！小娘がパプテマス様に向かつて……」

「よせサラ……」

シロッコは口を開じ、サラの肩を掴み、それから頬に手をあてているエリスに向かつて小さく頷いた。

「実を言えば……君の不殺戦法にも少し興味がある……」

「パプテマス様！？」

止めようとするサラ、エリスは口を開け黙らせる。

「……ドックにはジムがあるそうだ、好きに使いたまえ

シロッコの言葉にエリスは頷いてきちんと会釈した。

「ありがとうございます！……」

そしてドックへとその足を向かわせ走つていった。

「 よりしこのですか？」

サラは脇からシロッコに顔を向ける。

「 実に可憐だ、あれぞ勝利の女神だ…」

「 ぱ…パプテマス様？ ですが彼女は…」

「 彼女は裏切りはせんよ、裏切ったところでジム一機でこの戦艦相手に何が出来る？ 彼女はそこまでバカではないや…」

シロッコは自信が有りそつた口振りでつぶやいていた。

ドックには先程自分を躊躇しようとした男たちの姿があつた。

「 あーお前…！」

男の一人がエリスに気付き声を擧げる。

「 シロッコさんから出撃許可はでています。ジムってどれですか？」

それをエリスに言われた男たちは顔を見合せ疑問を浮かべる。

「 大佐から…いや」

「 早くなさい！！ 敵はまっちゃくれませんよっ！！」

まごつく隊員達をエリスはマリアの真似をしながら怒鳴り付ければ、男達は顔を見合せ、そして背後に聳える黒い機体に目を向けた。

「 あの黒い奴だが…」

「ありがとう！」

エリスはノーマルスーツも着ること無くジムクエルに向かいコクピットに乗り込んだ。

「なーーちょっとーーまでーお前ーー。」

男の一人がコクピットにやつてきた。

「この船にはパイロットはいないんですね？」

エリスはジムクエルのコクピットシートに入り、起動と共に座席横にあるジムのパラメーターを調整する端末キーボードを取り出しあいスピーデで弾き出す。

「たーーたしかにパイロットはないが……」

「なら、捕虜のわたしが戦いに出ればいいだけですね？」

エリスの言葉に男は頬をかいてエリスの手元のあまりの早さに驚愕する。

「しかしなあ……モビルスーツで裏切りを……」

「こんな機体で沈めれるような船なんですか？」

男は首を横に振る。

「『ドゴスギアは素晴らしい船だ！たかがジム一機に沈められるよ』

…な」

男は言葉を止めた理由、それはエリスの満面の笑みに見惚れていたからである。

「なら、裏切つても意味ないですよね？」

端末キー・ボードを弾き終えたエリスは座席横に押し退け操縦桿を握る。

「離れて下さい！挟みますよーー！」

エリスはそのまま漂う男を「クピットから蹴だし、ハッチを締めた。

「おー・おいーー！」

驚き顔のまま漂う男がモニターに映され、声が響く。
「いいのか？」

下に降りた男は下にいた男達と顔を見合わせた。

「わからん…」

「おー… おい…」

メカニックの男が声を上げ、男たちは端末に集まる。
「なんだこりゃ…」

端末はジムクエルのパラメーター・モニターである、凄まじいスピードで数字が羅列してモニターがスクロールしている。

「…あの短期間で設定を書き替えてやがる…何者なんだ？…
体…」

そうしている間にジムクエルは歩きだした。

「カタパルト開けて下さい！」

エリスはそのままカタパルトに向かうとビームライフルとシールドが取り付けられる、同時に上モニターにシロッコが映しだされた。

「君の不殺戦法…期待している…」

シロッコはいつになく撫然とした顔つきで言えば、エリスは手に力を込めた。

「了解です…」

モニターを切り、エリスはシートの位置を合わせ、震える指を掴んで止めた。

「やられんじゃない…やるのよ…エリス…」

自分の両頬を叩いて自らを鼓舞したエリスのジムクエルはカタパルトに移送され接続される。

「カタパルト接続完了だ！…いつでも発進してくれ！！」

無線からの声をきき、エリスは操縦桿を再び握る。

「エリス・クロード！ジム！発進します！」

そのままエリスのジムはカタパルトから打ち出され、無限の宇宙へ飛び出した。

【ピピピピ】

外に出るなり、無数のビームがエリスのジムを撃ち落とそうと迫り、エリスは機体のバランスに身をまかせながら肩のランサーと足の補助スラスターを上下に操作して機体を制止させ、スラスターを開いて上に飛び上がり、ビーム火線の上を通る。同時にサラミス改とジム？がレーダーに映し出され。

「……」

エリスは無線をオープンチャンネルを開いた。

「こちらは、ティーターンズ所属。エリス・クロードからエウーゴの艦隊へ、直ちに武装を解除し、後退して下さい……こちらに戦闘の意志はありません」

「あいつ……何をしている…」

ティーターンズの士官からの無線を入れようとするが、シロッコが横から手を出して止める。

「黙つて見ていたまえ」

そんなシロッコに士官は怪訝な顔をしていたが、帽子を深くかぶりなおしてから黙り込んだ。

「ティターンズがなにいってやがる！…」

それはエウーネのジムからの無線だった。そしてジム5機の編隊は真っ直ぐエリスへと突撃してきた。

「……」

エリスは自ら額の中にある種を割つた。

【ズギュン】

放たれたジムのビームをエリスのジムクエルは横に機体を反らしてすれすれに避けビームを打ち返す。

【ズギュンー】

放たれたビームはそのジムのビームライフルを撃ち抜き破壊する。

「…え…」

唖然とするエウーネのパイロットだがその間にもジムクエルは接近していく。

「下がつて下さい…！」

頭部バルカンで頭を蜂の巣にして戦艦の方に蹴飛ばす。

「な…なんだ…こいつ」

「囮め……」

4機のジム？はエリスを囮もつと展開するも、エリスはその中の1機にビームライフルを撃つ。

【ズギュン】

撃たれたビームライフルは、未来位置にいたジム？の頭部を的確に撃ち抜いて機能を奪う。

「くそおおー！」

3機のジムは編隊を崩さず真っ直ぐに向かってきた。エリスのジムクエルは1機の前に出てシールドで視界を塞ぎ、投げつけながらサーベルを引き抜きその両足を刈り取り、背後に周り頭部を撃ち抜いて蹴飛ばし、その反動を利用してバー二ニアをふかせて左右からのビームを避けつつ、右側のジムにビームライフルを向けて放ち、ジムの頭を撃ち抜き破壊する。

「はああああーーー！」

突撃してくるジム？はビームサーベルを引き抜く。

【ズギュンー】

その腕を放たれたビームにより破壊され、更にエリスのジムクエルはビームサーベルを抜いて両足を切断し、至近距離から頭部をビームで撃ち抜き破壊し、戦艦の方へ蹴飛ばした。

「素晴らしい……」

シロッコはそれを見ながら咳き拍手し、今まで怪訝な顔をしていた士官たちまで拍手しだした。

「エウーテ艦隊に再度通告します、彼らを回収し、直ちに後退してください。命まで奪つつもりはありません…繰り返します。彼らを回収し、直ちに後退してください」

「艦長…」

サリス改の艦長は聞きながら口を開じる。

「…要請に従おう」

「艦長…？」

不満を訴える副艦長を睨んで黙らせる。

「敵はたつた1機で我々の部隊を殺さずに制圧したのだぞー…？ノクピットを狙つて来たらもつと速くやられていふといふ事に気づかんのかー…？」

その艦長の言葉にブリッジクルーは蒼白となり。艦長は無線端末を奪い取る。

「MS隊を回収後、直ちに雷域を離脱する…」

サリス改から停戦信号が放たれ、撤退を確認したエリスはドゴス

ギアへと帰つて行つた。

「うむ！いい腕じゃ……」

ドックに着艦したエリスをシロッコとサラ、そして長身の老人が待つていた。

「素晴らしい戦いであつた！」

老人はエリスがコクピットから降りるなり拍手しながら歩み寄つて来た。

「…お褒めいただき光栄です」

エリスは怪訝そうに軽い会釈をする。と、老人は興奮した様子でエリスの手を取る。

「しかし何故、コクピットを狙わない？お主の腕ならわざわざ手足を打ち抜く必要もなかろう？」

疑問気な老人にエリスは表情を曇らせる。

「…敵は、戦力に乏しい部隊です…命を奪わなくとも機体の修理に多額のコストが掛かるはずです…旧ジオン公国のような部隊ならともかく、エウーゴならば資金に限界もありますよ」

そこでシロッコがエリスの変わりにそう老人に告げれば老人は納得したように頷いた。

「その腕、この艦で燃らせてくるには惜しい...どうじゃ？共に地球に降りてティターンズを指揮してみんか？お主の腕なら直ぐにエースパイロットと肩を並べられよ！」

それはティターンズへの誘いであり、エリスはちらりとシロッコに視線を送る。

「彼女には、わたしの設計したMSのテストパイロットをして頂く予定です、ジャミット閣下」

ジャミットは少し残念そうに頷いた。

「ならば仕方があるまい...エリスといったな？、いつでも気が向いたら地球へ来たまえ」

ジャミットはそう言い残して外へ向かい歩いていった。

「ありがとうございます、シロッコさん」

ジャミットの姿が見えなくなるのを確認したエリスは軽い会釈をした。

「ふむ、気にする必要はない。私こそ君のよつな素晴らしい女性に出会えた事を感謝したいところだよ」

そしてシロッコは顔を向ける。

「サラ、当面は君の部屋に彼女を置いてくれ

「あー・パパーテマス様ビビリへーー?」

「ああ言つてしまつたのだ、最新鋭機体を造らねばなるまい?」

シロッコはそのまま歩いていった。

「パパーテマス様、なんか楽しそう?」

サラはやつ言葉を漏らじてからエリスを睨む。

「ついて来なさい、エリス・クロード」

エリスはサラの後に付いていった。シロッコは歩きながら無線を取出した。

「わたしだ…素晴らしい逸材が見つかっただ…凍結させていた【タイタニア】を設計して欲しい…」

シロッコは不気味に笑いながら続けた。

「ジャミットフ閣下を降ろし、独断でフォンブラウンへ向かう…。その途中で落ち合つとしよう…」

シロッコは窓から見える宇宙を見つめていた。そして笑う。

「エリス・クロードか…ふふふふ…」

シロッコは不気味に笑い続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2268z/>

機動戦士ガンダムGGENERATION-月光蝶の羽音

2011年12月25日23時02分発行